

国見町文化財調査報告書(概報) 第3集

いし はら や ふさ
石原遺跡・矢房遺跡

—国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—

2003

長崎県国見町教育委員会

発行にあたって

このたび平成10年度から平成13年度にかけて実施しました国見中部地区圃場整備事業に伴う石原遺跡・矢房遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

石原遺跡・矢房遺跡は、国見町のほぼ中央部に位置し、両脇を河川に挟まれたなだらかな丘陵上に所在します。南側には雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。遺跡からは、旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており、特に旧石器時代の土石流の発見は、今も昔も火山活動などの自然の脅威に立ち向かっていく人間の強さを感じられます。また、古墳時代の住居跡からは多くの土器がまとまって発見され、当時の人々の生活・文化の解明には欠かせない資料となりましょう。そのほか、中世の墓と考えられる遺構からも完形品の土師器が多数発見されており、当時の人々の葬送に対する精神文化の解明にも一石を投じるものとなるでしょう。

国見町の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。

本町では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本町にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、県学芸文化課ならびに関係の皆様に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成15年3月31日

長崎県国見町教育委員会

教育長 原 宮 之

例　　言

1. 本報告は1998年～2002年(平成10年度～平成13年度)に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町に所在する石原遺跡・矢房遺跡の緊急発掘調査の報告(概報)である。

2. 調査は、長崎県島原振興局の依頼を受け、国見町が実施した。

3. 調査は国見町教育委員会が担当した。

調査は1997年11月4日から1998年3月31日(平成9年度)に範囲確認調査を実施し、その結果をもとに下記の期間発掘調査を実施した。

1998年11月6日～1998年12月21日(平成10年度) 石原1区～4区・矢房1区～2区

1999年5月18日～1999年9月13日(平成11年度) 石原5区～6区・石原8区～10区

2000年3月7日～2000年3月31日(平成11年度) 石原7区, 11区・矢房3区

2001年1月11日～2001年3月26日(平成12年度) 矢房4区～19区

2002年3月1日～2002年3月31日(平成13年度) 石原19区～25区

4. 調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教　育　長	阿比留　亨(平成10年度～平成12年度)
	同	教　育　長	原　宮之(平成12年度～現在)
	同	教　育　次　長	松本　安央(平成10年度～平成11年度)
	同	教　育　次　長	吉田　正昭(平成12年～現在)
	同	社会教育係長	江副俊一郎(平成10年度～平成13年度)
調査担当	同	教　育　次　長	松本　安央(平成10年度)
	同	文化財調査員	松崎由紀子(平成10年度～平成11年度)
	同	社会教育係	辻田　直人

5. 現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・植木貴道・東文子・林繁美・松崎・辻田が行い、遺物の実測・製図は早稲田一美・濱本秀美・前田美保・酒井恵・竹中哲朗(文化財調査員、平成14年度～)・辻田が行った。写真は現地調査を松崎・辻田が、遺物写真是竹中・辻田が行った。

6. 遺構実測の一部は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

7. 火山灰検出・年代測定業務は(株)古環境研究所に委託した。

8. 空中写真撮影業務は(株)文化財環境研究所(現㈱九州文化財研究所)に委託した。

9. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は国見町埋蔵文化財整理室で保管している。

10. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標はI系による。

11. 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。橋昌信(別府大学)、松藤和人(同志社大学)、佐川正敏(東北学院大学)、小畠弘己(熊本大学)、木村幾多郎(大分市歴史資料館)、平川　南(国立歴史民俗博物館)、長岡信治(長崎大学教育学部)、佐藤良二(二上山博物館)、早田勉(古環境研究所)、中川和哉((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)、絹川一徳(大阪市文化財協会)、森川実、水ノ江和同(福岡県総務部国立博物館対策室)、大坪芳典(佐賀県教育委員会)、宮崎範行(熊本県教育委員会)、大野薰(大阪府教育委員会)、黒川忠弘(鹿児島県立埋蔵文化財センター)、宮田浩二(宮崎県串間市教育委員会)、萩原博文(平戸市教育委員会)、川道寛(長崎県学芸文化課)、古門雅高(長崎県教育委員会)、渡邊康行(埋蔵文化財サポートシステム)、宇土靖之(長崎県有明町総合文化会館)、遠部　慎(長崎県南串山町教育委員会)福岡旧石器文化研究会、長崎県教育委員会(敬称略・順不同)

12. 本書の執筆は竹中哲朗・辻田直人が分担し、各章及び各節文末に執筆者名を記した。

13. 本書の編集は竹中・辻田による。

目 次

巻頭図版

発刊にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯	1 p
第1節 発掘調査にいたる経緯 (辻田)	
第3節 発掘調査の方法及び経過 (辻田)	
第2章 遺跡の立地	6 p
第1節 国見町の概要 (辻田)	
第3節 層位 (辻田・竹中)	
第3章 旧石器時代	8 p
第1節 土石流 (辻田)	
第2節 出土遺物 (辻田)	
第4章 繩文時代	15 p
第1節 土坑・溝 (竹中)	
第2節 土偶・土器・石器 (辻田・竹中)	
第5章 古墳時代	39 p
第1節 住居跡・土坑墓 (竹中)	
第6章 古代	45 p
第1節 土坑・溝・骨蔵器 (竹中)	
第7章 中世	55 p
第1節 土坑・製鉄炉 (竹中)	
第3節 古代から中世の特徴的な遺物 (竹中)	
第8章 まとめ	71 p
第1節 旧石器時代について (辻田)	
第2節 繩文時代について (辻田)	
第3節 矢房遺跡検出の古墳時代住居跡出土土器 (竹中)	
第4節 石原遺跡検出の古代土坑 (竹中)	
付 猪之瀬遺跡中世土坑墓報告 (91~93 p)	
第5節 矢房遺跡検出の中世土坑墓 (竹中)	
第9章 自然科学分析	94 p
第1節 石原遺跡の土層とテフラ	
第2節 放射性炭素 (¹⁴ C) 年代測定結果	

挿 図 目 次

第1図 石原遺跡・矢房遺跡位置図(1/20,000)	
第2図 TP 8 土坑出土遺物実測図(1/3) 1	
第3図 TP 8 土坑検出状況・出土遺物検出状況 (1/40・1/10) 2	
第4図 試掘調査トレンド設定図(1/5,000) 3	
第5図 調査区配置図 5	
第6図 石原遺跡基本土層図 7	
第7図 矢房遺跡基本土層図 7	
第8図 石原遺跡24区土石流検出状況① 8	
第9図 石原遺跡24区疊層下堆積状況 8	
第10図 石原遺跡24区土石流検出状況② 8	
第11図 石原遺跡出土後期旧石器時代の石器 (2/3) 9	
第12図 石原遺跡 a～e 区旧石器時代遺物分布 図(1/80) 11	
第13図 石原遺跡 a～e 区出土旧石器時代の石 器(2/3) 13	
第14図 石原遺跡24区Ⅲ層出土石器(2/3) 14	
第15図 石原遺跡層位外出土遺物(2/3) 14	
第16図 石原遺跡19区 SK02(1/20) 15	
第17図 石原遺跡19区 SK02・SD01出土遺物 (1/3・1/2) 16	
第18図 石原遺跡19区 SD01(1/20) 17	
第19図 石原遺跡19区 SD01出土石器 (1/3・2/3) 18	
第20図 石原遺跡22区・西壁 SD01セクション 図(1/40) 18	
第21図 石原遺跡22区 SD01(1/40) 19	
第22図 石原遺跡出土縄文時代早期土器① (1/2) 22	
第23図 石原遺跡出土縄文時代早期土器② (1/2) 23	
第24図 石原遺跡23区第Ⅳ層遺物分布図(1/60) 23	
第25図 石原遺跡 3 区縄文時代早期遺物分布図 (1/60) 23	
第26図 石原遺跡出土縄文時代早期土器③ (1/2) 24	
第27図 石原遺跡出土縄文時代早期土器④ (1/2) 25	
第28図 石原遺跡出土縄文時代早期土器⑤ (1/2) 26	
第29図 矢房遺跡出土縄文時代早期土器 (1/2) 26	
第30図 石原遺跡 5 区出土縄文時代前期土器 (1/2) 29	
第31図 石原遺跡 5 区出土遺物分布図(1/60) 30	
第32図 石原遺跡 5 区出土 その他の縄文時代土器(1/2) 30	
第33図 石原遺跡 9 区出土縄文時代土偶 (1/2) 32	
第34図 石原遺跡出土縄文時代晚期土器① (1/2) 33	
第35図 石原遺跡出土縄文時代晚期土器② (1/3・1/2) 34	
第36図 石原遺跡出土縄文時代早期石器 (2/3) 35	
第37図 石原遺跡5区出土縄文時代前期及び後 期石器(2/3・1/2) 36	
第38図 石原遺跡・矢房遺跡出土縄文時代晚期 石器(2/3・1/2) 37	
第39図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡平面・セ クション図(1/30) 39	
第40図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ①(1/3) 41	
第41図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ②(1/3) 42	
第42図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ③(1/3) 43	
第43図 矢房遺跡16区土坑墓(1/40) 44	
第44図 石原遺跡 8 区 Pit01・出土遺物 (1/10・1/3) 45	
第45図 石原遺跡 8 区 SK01 (1/20) 46	
第46図 石原遺跡 8 区 SK01出土遺物 (1/3・1/2) 47	
第47図 石原遺跡 8 区 SK02(1/20) 48	

第48図	石原遺跡8区 SK02出土遺物(1/3)	49
第49図	石原遺跡24区 SK01(1/10)	51
第50図	石原遺跡24区 SK01出土遺物(1/3)	51
第51図	矢房遺跡4区 骨蔵器検出状況写真	52
第52図	矢房遺跡4区出土遺物(1/3)	52
第53図	矢房遺跡12~13区 SD01出土遺物 (1/3).....	53
第54図	矢房遺跡12~13区 SD01(1/40)	53
第55図	矢房遺跡3区 SK01(1/20)	55
第56図	矢房遺跡9区 SK01・配石・出土遺物 (1/40・1/3).....	56
第57図	石原遺跡19区 SK01・出土遺物(1/40· 1/3).....	57
第58図	石原遺跡10区 SK01 一製鉄炉— (1/40).....	58
第59図	石原遺跡10区 SK01出土遺物(1/3)	59
第60図	石原遺跡24区 Pit列(1/40)	60
第61図	石原遺跡24区 Pit内出土遺物(1/3)	60
第62図	石原遺跡4・8~10区掘立柱建物群 (1/200).....	61
第63図	石原遺跡4・8~10区掘立柱建物群SB 01~04(1/400).....	62
第64図	石原遺跡4・8~10区 SB01(1/100)	63
第65図	石原遺跡4・8~10区 SB02(1/100)	63
第66図	石原遺跡4・8~10区 SB03(1/100)	64
第67図	石原遺跡4・8~10区 SB04(1/100)	64
第68図	石原遺跡6区道路・区画遺構(1/100)	65
第69図	石原遺跡20区 SD01・SD02(1/80)	67
第70図	石原遺跡出土墨書・刻書土器(1/3・1/1)	68
第71図	石原遺跡・矢房遺跡出土青磁片・石製品 (1/3・1/2)	68
第72図	古代から中世の特徴的な遺物(1/3)	69
第73図	石原遺跡a~e区遺物分布図(1/160)	73
第74図	縄文時代早期壺形土器一覧図(1/6)	77
第75図	長崎県諫早市下峰原高場遺跡壺形土器 (1/2)	78
第76図	島原半島検出の住居跡出土土器の様相 (1/6)	85
第77図	大野原遺跡・七反畑地区廃棄土坑出土 遺物(1/6)	89
第78図	今福遺跡2号木棺・林ノ辻遺跡2号土 坑(1/40)	91
第79図	猪之瀬遺跡土坑・出土遺物実測図 (1/40・1/3)	93
第80図	自然科学分析図	95

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧.....	4
第2表	旧石器時代出土石器計測表.....	14
第3表	石原遺跡19区 SK02・SD01 出土土器観察表.....	20
第4表	縄文時代早期土器観察表.....	27
第5表	縄文時代前期土器観察表.....	31
第6表	縄文時代晩期土器観察表.....	34
第7表	石原・矢房遺跡出土縄文時代 石器計測表.....	38
第8表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表①	42
第9表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表②	43
第10表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表③	44
第11表	石原遺跡8区 Pit01・SK01 出土土器観察表.....	50
第12表	石原遺跡8区 SK02・24区 SK01, 矢房遺跡4区・12~13区 SD01 出土土器観察表.....	54
第13表	中世土窯器坏・皿法量計測表.....	59
第14表	掘立柱建物計測表.....	62
第15表	石器集中地点器種別及び石材別集計表	72
第16表	石器石材分類表.....	74
第17表	早期壺形土器集成図使用実測図引用ヶ 所一覧.....	79
第18表	島原半島検出中世土坑.....	90

図版目次

卷頭図版①	①遺跡遠景 ②旧石器時代の石器 ③矢房遺跡中世 土坑墓・配石
卷頭図版②	①石原遺跡 旧石器時代遺物出土状況
卷頭図版③	矢房遺跡16区 ①古墳時代中期住居跡 ②古墳時代中期住居跡出土土師器
卷頭図版④	矢房遺跡 9 区 ①中世土坑墓 ②中世土坑墓出土土師器 ③石原遺跡出土墨書き、刻畫土器
図版 1 遺跡上空写真(昭和35年度国土地理院)	石原遺跡 8 区 Pit 検出状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK01検出状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02検出状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02半載状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02セクション 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02完掘状況 105
図版 2 石原遺跡19区調査風景	石原遺跡 8 区 SK02遺物出土状況 106
矢房遺跡14区土層	石原遺跡24区 SK01検出状況①～③ 106
石原遺跡24区土層
石原遺跡24区旧石器(AT直上)遺物 出土状況	石原遺跡24区 SK01セクション①～② 106
石原遺跡22区土層(縄文時代晚期)	石原遺跡24区 SK01完掘状況 106
石原遺跡 a～e 区土層	石原遺跡24区 Pit 列検出状況 106
石原遺跡 e 区遺物出土状況
石原遺跡 b 区遺物出土状況
図版 3 石原遺跡 b 区ナイフ形石器出土状況
.....
石原遺跡24区縄文時代早期土器出土状 況
石原遺跡19区 SD01検出状況
石原遺跡19区 SD01遺物出土状況①～ ④
石原遺跡19区 SD01完掘状況
図版 4 石原遺跡19区 SK01検出状況①～③
.....
石原遺跡19区 SK01完掘状況
石原遺跡22区 SD01検出状況
矢房遺跡16区住居跡検出状況①～②
矢房遺跡16区住居跡遺物出土状況①
図版 5 矢房遺跡16区住居跡遺物出土状況② 105
矢房遺跡16区土坑墓 105
図版 6 石原遺跡 8 区 SK02遺物出土状況	106
石原遺跡24区 SK01検出状況①～③ 106
石原遺跡24区 SK01セクション①～②	106
石原遺跡24区 SK01完掘状況 106
石原遺跡24区 Pit 列検出状況 106
図版 7 石原遺跡24区 Pit 列完掘状況	107
矢房遺跡12・13区 SD01検出状況	107
矢房遺跡12・13区 SD01検出状況	107
矢房遺跡12・13区 SD01須恵器出土状 況①②	107
矢房遺跡 3 区 SK01検出状況	107
矢房遺跡 3 区 SK01セクション	107
矢房遺跡 3 区 SK01完掘状況	107
図版 8 矢房遺跡 9 区 SK01検出状況①～②	108
矢房遺跡 9 区 SK01遺物出土状況①～②	108
矢房遺跡 9 区 SK01完掘	108
矢房遺跡 9 区 配石	108
石原遺跡19区 SK01検出状況	108
石原遺跡19区 SK01完掘	108

図版9	石原遺跡10区 SK01①～⑥	109	図版17	石原遺跡19区 SD01出土繩文土器	117
	石原遺跡20区 SD02①～②	109		石原遺跡繩文時代晩期土器	117
図版10	矢房遺跡住居跡と土坑墓	110	図版18	石原遺跡出土繩文時代土偶	118
	矢房遺跡9区土坑墓と配石	110		繩文時代の石器	118
	石原遺跡4区・8～10区 掘立柱建物群	110	図版19	矢房遺跡16区住居跡出土土器①	119
	石原遺跡SB01	110	図版20	矢房遺跡16区住居跡出土土器②	120
	石原遺跡SB03・04	110	図版21	TP 8 土坑出土土器, 石原遺跡8区 Pit01出土土器	121
	石原遺跡6区道路・区画遺構	110	図版22	石原遺跡8区 SK01,8区 SK02出土土器	122
図版11	旧石器時代の石器①	111	図版23	石原遺跡4区・矢房遺跡9区 SK01・配石出土土器	123
図版12	旧石器時代の石器②	112	図版24	石原遺跡10区 SK01・ 古代から中世の特徴的な遺物	124
図版13	石原遺跡繩文時代早期土器①	113			
図版14	石原遺跡繩文時代早期土器②	114			
図版15	石原遺跡繩文時代早期土器③	115			
図版16	石原遺跡5区繩文時代前期土器	116			



第1図 石原遺跡・矢房遺跡位置図(1/20,000)

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯

平成8年度に長崎県島原振興局より、国見中部地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け、国見町教育委員会が主体となり1997年11月4日から1998年3月31日（平成9年度）にかけて遺跡範囲確認調査を行った。調査は圃場整備事業予定範囲に、任意に2m×2mの試掘坑を30箇所（120m²）設定し行った（第2節参照）。その結果、石原遺跡・矢房遺跡が新規に発見された。協議の結果、設計変更により遺跡の大部分は盛土により保存し、農道・用排水路および掘削により破壊される部分については本調査を行うこととなった。本調査は1998年（平成10年度）から毎年断続的に行い、矢房遺跡については2000年（平成12年度）で現地の調査を終了した。石原遺跡については2003年（平成15年度）に現地の調査が終了する予定である。（辻田）

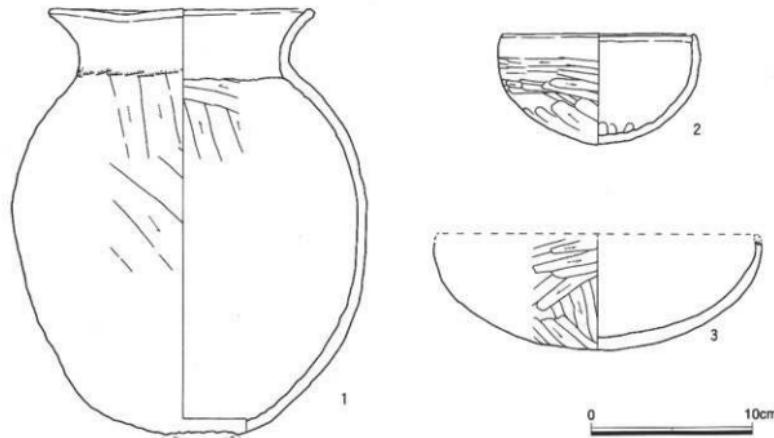
第2節 国見中部地区試掘調査

（1）試掘調査の目的（第4図）

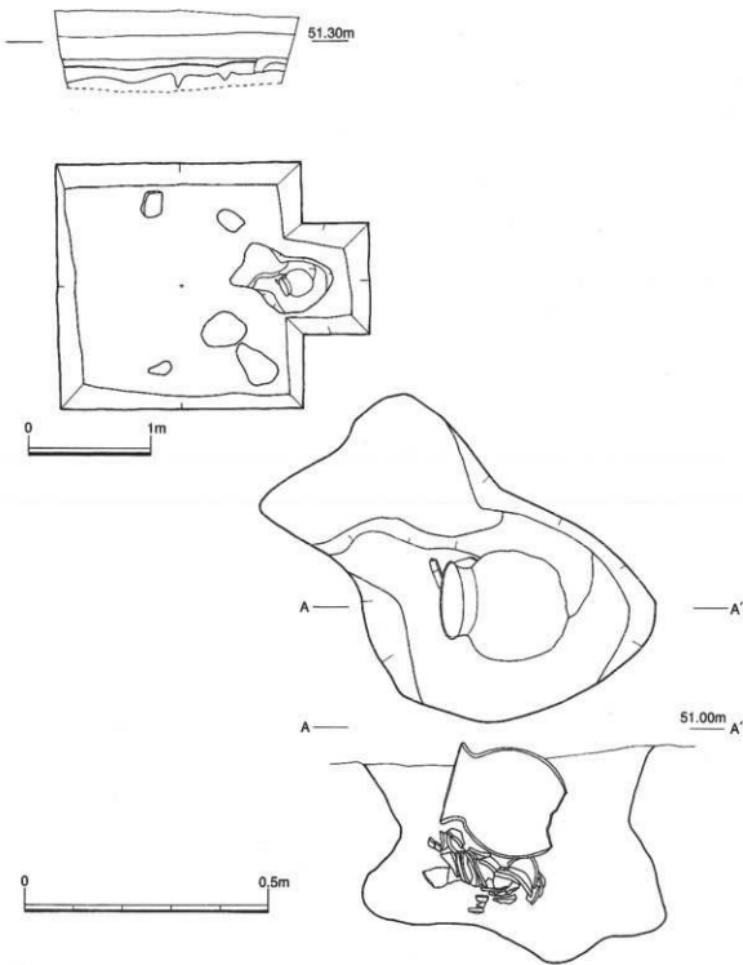
国見中部地区県営圃場整備事業予定地区に、遺跡範囲および新規発見遺跡の確認のため、試掘調査を実施した。試掘調査は平成9・10の二ヵ年を行い、平成9年度の調査では30ヶ所の試掘坑（2m×2m）を設定した。その結果、石原遺跡・矢房遺跡の二遺跡を新たに発見し、上篠原遺跡の南側への範囲拡大という成果があった。特に上篠原遺跡の南側への大幅な範囲拡大は、5世紀代の朝鮮半島製陶質土器を出土した住居跡（諫見1988）を含む集落が広がる可能性を示しており学術的に重要である。石原遺跡・矢房遺跡の二遺跡の新たな発見は、上篠原遺跡周辺の古代・中世の状況を把握するためにも重要な位置を占めてくるものと思われる。

（2）試掘調査の成果（第2図～第4図）

石原遺跡・矢房遺跡の新規発見：TP1～5、7～12は土黒西川右岸に設定し、TP6のみは左岸に設定した。TP1～2、TP7～9で古代から中世の遺物・遺構（Pit・土坑）・良好な遺物の包含層を確認し、石原遺跡、矢房遺跡として新規発見の遺跡登録を行った。特にTP8では完全な形に近い土



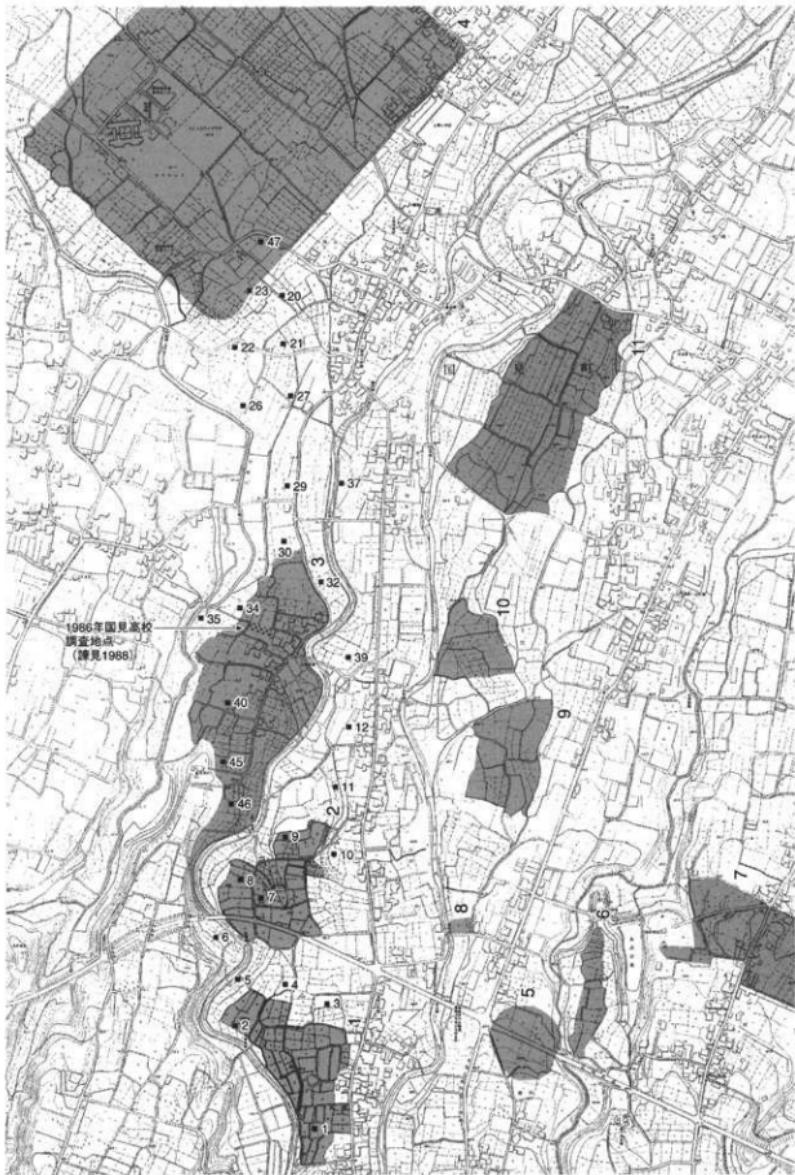
第2図 TP 8 土坑出土遺物実測図(1/3)



第3図 TP 8 土坑検出状況・出土遺物検出状況(1/40・1/10)

師器壺一個体と壺・壺破片多数が検出されている。壺1は横にねせた状態で出土しており、底部は焼成後に穿孔されている。ほかに壺・壺破片が1の下より出土しており、壺は二個体に復元できた。第2図に示したものは土師器壺1点、壺2点であり、他に別個体の土師器壺胴部片が出土しているが図示できなかった。これらは古墳時代中期～後期にかけての土師器の特徴を示しており、上篠原遺跡との関係が注目される。

第4図 試掘調査トレーンチ設定図(1/5,000)



小数字は、TP番号

調査の経緯 3

土師器壺1は、丸く外反する口縁部にやや長い球体を呈する胴部で、底部は丸底であると思われるが焼成後に5センチほどの円形に外面より打ち抜かれている。その穿孔部分の破片は検出されていない。口縁部は刷毛調整のあと口唇部を中心に行き回すようにナデ調整、外面は刷毛調整、内面は丁寧に笠割りが行われている。形態的には上篠原遺跡1号住居跡脇で検出された土師器壺と同系列もしくは若干、新しくなるものかと思われる。

2はほぼ完全な形に復元できた土師器壺で、外面は底部付近では放射状に、中位以上では横位の笠割りが細かく丁寧にみられる。口唇部を中心に横ナデがみられ、口唇部内面は強く押えられており溝状に凹んでいる。3は土師器壺で、1/4ほどの破片資料である。口縁部が内湾すると思われるが、口唇部が失われている。ほかに土師器壺胴部片があり、外面が刷毛調整のものと丁寧に撫でられているものとがあり、器厚も異なっている。

出土状態と遺物の観察を加味すると、土坑への廻棄が行われる前に、壺については底部を穿孔する行為を行ったものと考えられる。

上篠原遺跡の南への範囲拡大：TP30-32-34-35-39-40-45-46は上篠原遺跡の範囲確認を目的として土黒西川左岸に設定したもので、TP40-45-46において良好な状態の遺物包含層と遺構（Pit・土坑）を多数を発見した。既存の遺跡範囲外での遺構・遺物包含層の発見であり、土黒西川左岸に広がる一帯の台地上に上篠原遺跡が広がっている可能性が高く、遺跡範囲の拡大を決定した。（竹中）

参考文献

諫見富士郎1988. 3『上篠原遺跡』概要報告書 長崎県立国見高等学校考古学研究部

※当時の調査で出土した遺物は現在長崎県立国見高等学校考古展示室1Fに保管。一部は展示室2Fで陳列されている。

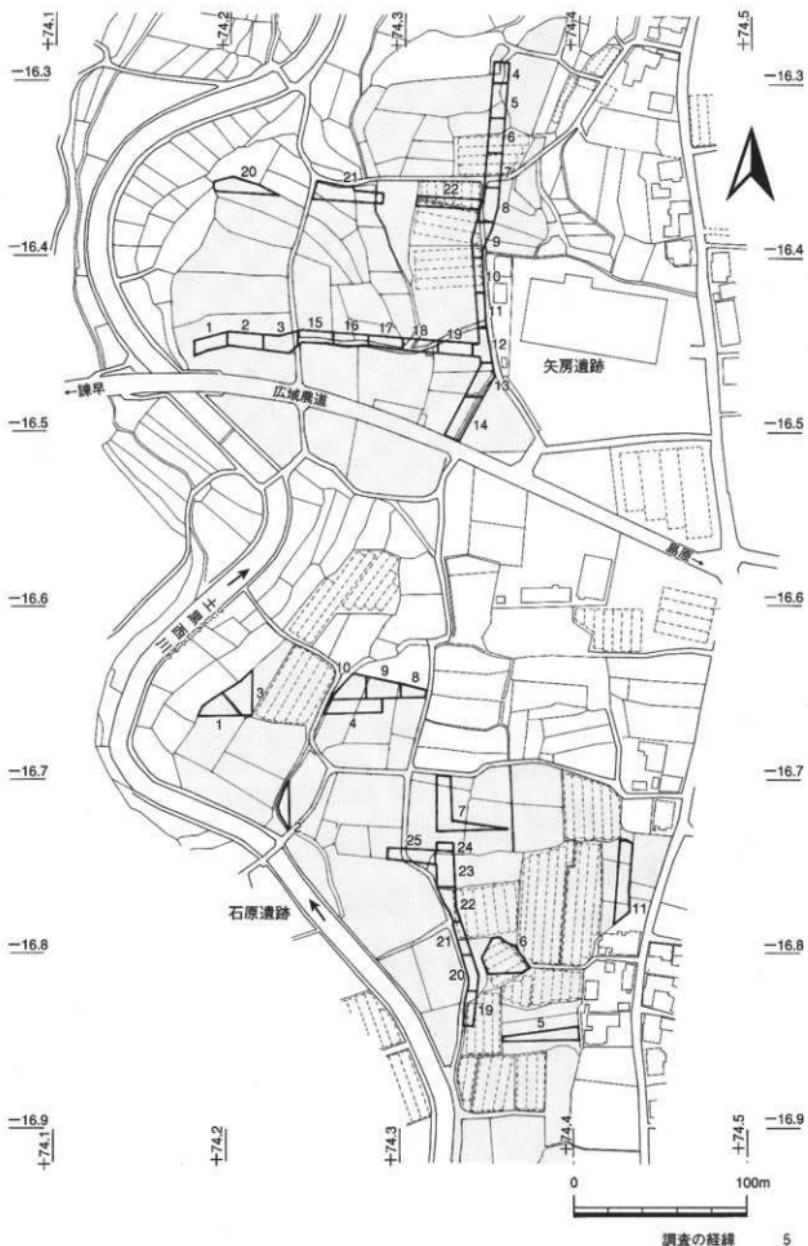
第3節 発掘調査の方法及び経過（第5図）

本調査は国土座標I系を使用し、調査対象範囲（農道建設予定範囲及び用排水路建設予定範囲）を20mメッシュに区切り、年度毎に順次調査を実施した。しかしながら、調査区の立地条件や時間的な制約により、必ずしも20mメッシュの調査区とはなっていない。石原遺跡については、1区～25区に分けて調査を実施した。また、19区～20区にかけては縄文時代文化層調査終了後さらに下層に旧石器時代文化層を確認したため、a～e区に細分して調査を行った。矢房遺跡については1区～22区に分けて調査を実施した。両遺跡とも土層の堆積状況は良好で、表土（水田耕作土）及びその下の水田床土を重機により除去し、その後はすべて人力により発掘した。遺物の取り上げは、基本的には同一層一括で取り上げ、旧石器時代及び縄文時代の一部の遺物についてはドットマップを作成し取り上げた。また、各時代の遺構出土遺物については可能な限り実測し取り上げた。発掘は可能な限り下層まで掘り下げ、部分的には基盤層の検出まで行った。（辻田）

第1表 周辺遺跡一覧（番号は第4図に対応）

遺跡名	時代	立地	種別	所在地	備考
1 石原遺跡	旧石器～中世	低丘陵	集落	国見町宮田名字石原	
2 矢房遺跡	旧石器～中世	低丘陵	集落	国見町宮田名字矢房	
3 上篠原遺跡	古墳～古代	丘陵	集落	国見町篠原名字上篠原	住居跡から陶質土器
4 真正寺条里跡	弥生～古代	平野部	条里・集落	国見町川原田名字真正寺	古代条里
5 金山遺跡	旧石器～中世	低丘陵	古墳・集落	国見町金山名字鬼塚	晚期集落
6 松尾遺跡	旧石器～古代	台地	集落	国見町高下名字松尾	後期旧石器初頭・縄文早期耳栓
7 五万長者遺跡	旧石器～古代	丘陵	寺院・集落	国見町高下名字平野山	版築遺構・老司系瓦
8 杉ノ元遺跡	古代	丘陵	集落	国見町金山名字杉ノ元	古代集落
9 小中野A遺跡	旧石器～中世	丘陵	集落	国見町金山名字小中野	墨書き・刻書土師器
10 小中野B遺跡	旧石器～古代	丘陵	集落	国見町馬場名字小中野	弥生後期河川跡
11 十園遺跡	旧石器～中世	丘陵	集落・製鉄	国見町馬場名字十園	弥生後期環濠・大型住居・製鉄跡

第5図 調査区配置図



第2章 遺跡の立地

第1節 国見町の概要

国見町は島原半島の北側に位置し、雲仙から有明海に向かって撥状に広がる。面積38.20km²、人口11,828人（平成14年4月1日現在）を数える。昭和31年に「多比良（タイラ）町」と「土黒（ヒジク）村」が合併し「^{はい}国見町」は誕生した。その後昭和32年には「神代（コウジロ）村」も加わり現在の「国見町」となっている。

主な基幹産業は農業で、近年はイチゴのビニールハウス栽培が特に盛んである。その他の農作物では「八斗木（ハットギ）白ねぎ」が有名で都心の高級料亭でも需要が多い。また、以前は漁業が盛んで、明治初期から戦後までは「バッシャ船」と呼ばれる大型の木造船で東シナ海まで漁に出ていた。現在はその役目を終えた最後のバッシャ船が国立民俗学博物館に保存されている。昭和31年からは海苔の養殖も開始され町水産業の根幹を担ったが、現在では海苔養殖業者は激減し、多比良地区国道251号線沿いに立ち並ぶ「海苔乾燥小屋」が当時の面影を残すのみとなっている。そのほか、有明海で取れる渡りガニの「がざみ」が外洋から渡ってくる際、国見町多比良近海で収穫される時期が最もうまみが増すとされ「多比良ガニ」とよばれて珍重されている。春先には潮干狩りも盛んに行われ、最盛期には海岸の砂浜が見えなくなるほどの観光客が訪れる。また、県立国見高等学校は全国でも屈指のサッカー強豪校としては有名だが、同校「考古学研究部」も島原半島を主なフィールドにこれまでに多くの調査・研究を重ね大きな成果をあげている。特に学校敷地内に考古資料館や考古博物館を建設し、古墳や堅穴住居などを地域住民と協力して製作するなど、文化財保護の啓発活動も行っている。考古資料館には旧石器時代～近世まで遺物が収蔵されており、その数は膨大で貴重な資料が多い。

ちなみに町のキャッチフレーズは『フルーツと多比良ガニとサッカーのまち国見町』である。（辻田）

第2節 石原遺跡・矢房遺跡の地理的・地形的環境（図版1）

島原半島は長崎県南部、有明海にむかって胃袋状に突き出た半島で、雲仙普賢岳を頂点とした円錐状を呈する。半島の北側は、半島南側の急峻な地形と異なり、雲仙岳より広がるだらかな火山性扇状地が広がり、国見町はその扇状地のほぼ中央を南北に切り取るような「撥状」の行政区となっている。町内で最も標高の高い九千部岳で1,062mを測り、約10kmで有明海に達する。石原遺跡・矢房遺跡は海岸から約3kmの距離で、現在は広域農道「グリーンロード」の南北で2分割されているが、当初は一連の遺跡であったと考えられる。雲仙山麓より伸びる緩やかな低丘陵上に位置し、標高は約50～60mを測る。丘陵の両脇は土黒川、土黒西川が北上し、その外側には比較的高位の丘陵が続く。遺跡は低丘陵の西端、土黒西川の河畔に広がり、河床との比高差は2～3mを測る。（辻田）

第3節 層位（第6図・第7図・図版2）

石原遺跡・矢房遺跡の層序は調査区によって大きく異なる。ここでは両遺跡の基本的な土層について記述し、その詳細については各章において必要に応じて述べる。また、矢房遺跡の層位は石原遺跡の基本土層に合わせて記載しており、部分的に欠落や追加が存在する。

石原遺跡基本土層（第6図）

第I層：水田耕作土。

第II層：床土、旧水田耕作土。

第III層：赤黒色土層。角閃石安山岩の亜円礫を若干含む。中世遺物包含層。

- 礫層：5cm以下の角閃石安山岩の円礫。水成堆積層。古代～中世遺物包含層。
- 第Ⅲa層：きめの細かい赤黒色土。古代遺物包含層。
- 第Ⅲb層：きめの細かい暗赤褐色土。縄文晚期遺物包含層。
- 第Ⅳ層：暗灰褐色土。
- 第Ⅴ層：灰褐色土。黄褐色の土粒がブロック状に混入する。(アカホヤ火山灰検出)
- 第Ⅷ層：きめが細かくやや繊りのある黒色土。縄文時代早期遺物包含層。
- 第IX層：非常に硬質で角閃石安山岩の極小粒を多く含む暗褐色土。
- 第X層：きめが細かくやや粘りのある黒色土。
- 第XIa層：繊りがあり角閃石安山岩小礫を若干含む黄褐色土。
- 第XIb層：やや硬質で角閃石安山岩亞角礫を含む暗褐色土。
- 第XII層：硬質で非常に粘性が強く角閃石安山岩亞角礫を多く含む黄褐色土。旧石器時代遺物包含層。

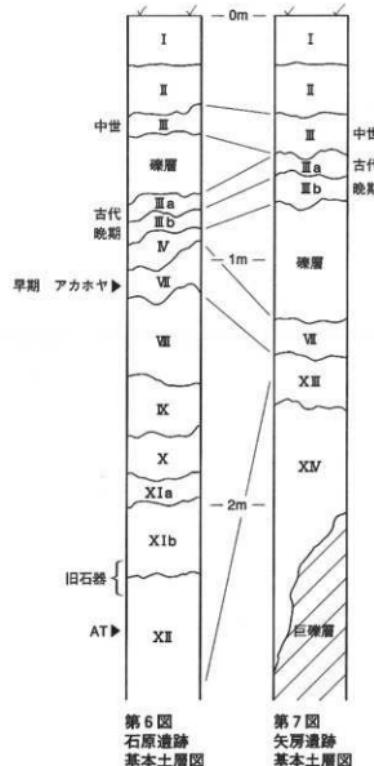
(AT火山灰検出)。

※第V層と第VI層が欠落しているが、

石原遺跡19区～20区にかけてのみ存在する。第V層が縄文中期の遺物包含層。
第VI層はVIa～VIcに細分されVIbが旧石器遺物包含層となる。

矢房遺跡基本土層(第7図)

- 第I層：水田耕作土。
- 第II層：床土、旧水田耕作土。
- 第III層：赤黒色土層。角閃石安山岩の亞円礫を若干含む。中世遺物包含層。
- 第IIIa層：きめの細かい赤黒色土。古代遺物包含層。上層(やや白色)及び下層に細分可能。
- 第IIIb層：きめの細かい暗赤褐色土。縄文晚期遺物包含層。
- 礫層：固くしまった土石流堆積層。
- 第VII層：灰褐色土。黄褐色の土粒がブロック状に混入する。縄文時代早期遺物包含層。
- 第VI層：きめが細かくしまりのある黒色土。
- 第XIV層：硬くしまったきめの細かい黄褐色土。その下層は人頭大から3mを越す巨礫を含む礫層。



第3章 旧石器時代

第1節 土石流（第8図～第10図）

石原23区～石原24区において、直径0.5～2mを越す角閃石安山岩礫群が広範囲にわたって検出された。直径2mを越す巨礫は石原24区側（北側）に集中しており、石原23区側（南側）に行くにつれてだんだんと礫は小さくなる。礫の堆積レベルはまちまちで、全ての礫が同時期の堆積ではないことを物語っている。また、礫と礫の間の土層堆積は土石流や水成堆積によるものではなく、他の調査区と同様の堆積状態である。従って、この巨礫群は土石流による膨大な水圧によって運ばれたもので、土石流の水流が去った後は、礫のみが累々と点在する状況であったことが推測される。石原24区は火山灰分析により最下層の第XII層からAT火山灰が検出されている。土石流によって運ばれた巨礫群は第XII層より上位で、また、アカホヤ火山灰が検出された第V層に覆われる、もしくは半分以上埋没するものが多い。したがって、この土石流の発生した時期は、AT降灰後からアカホヤ降灰前の数度にわたるものと想定される。※長崎大学長岡信治助教授に現地指導をいただいた。

（辻田）



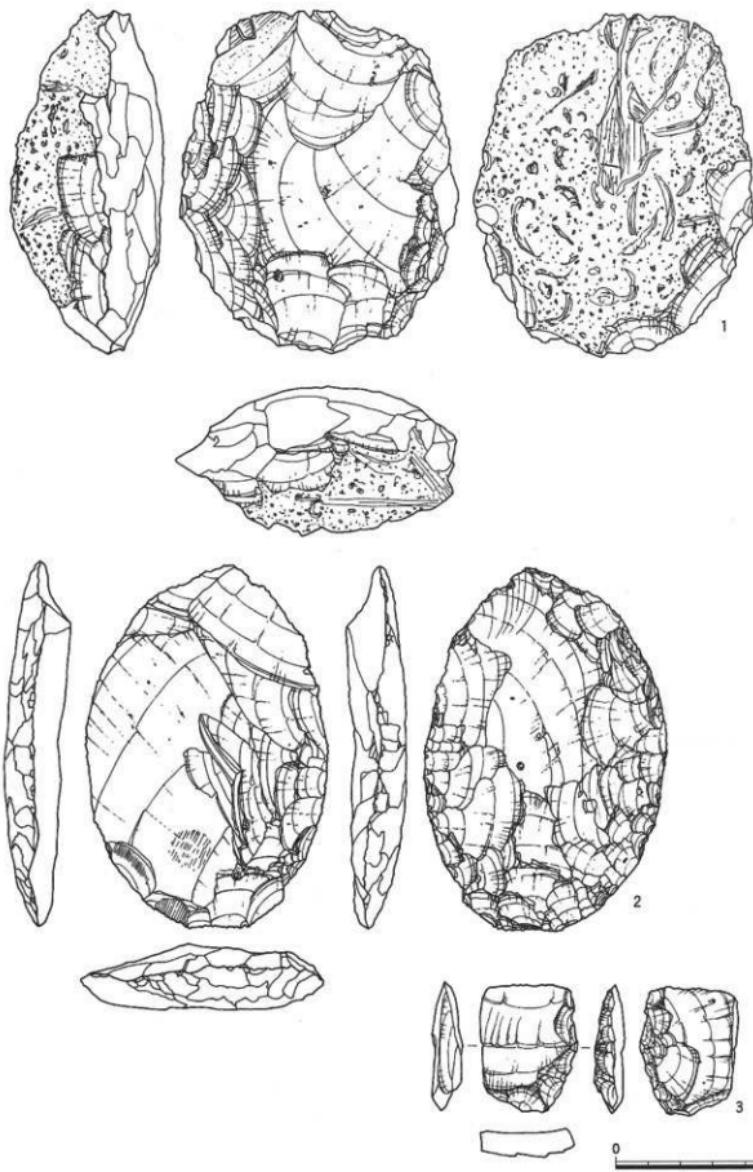
第8図 石原遺跡24区土石流検出状況①（北より）



第9図 石原遺跡24区礫層下堆積状況



第10図 石原遺跡24区土石流検出状況②（北より）



第11図 石原遺跡出土後期旧石器時代の石器(2/3)

第2節 出土遺物（第11図～第15図・図版11・12）

石原遺跡の主な旧石器遺物出土地点は3ヶ所である。石原1区、3区、10区の遺跡の最西端と、石原19区～20区（石原a～e区）にかけての第Vlb層を中心とした層位と、石原24区の第XII層直上である。石原1区、3区、10区は土黒西川が西側へ蛇行する岸辺に当たり、後期旧石器時代初頭の所産と考えられる石器が検出されている。縄文早期や縄文晩期の遺物と混在しているが、遺物の摩滅はほとんどなく、該期の遺跡が近在するものと考えられる。石原19区～20区（石原a～e区）にかけての第Vlb層は砂を多く含み、河川の影響を受けた堆積層である。しかしながら遺物にはほとんど摩滅は見られず、河川近くの自然堤防上において営まれた遺跡と考えられる（註1）。第Vlb層前後の土層に鍵となる火山灰層ではなく、石器群の時期については石器組成・剥離技術から判断せざるを得ない。ナイフ形石器には典型的な縦長剥片剥離技術は見られず、幅広の剥片を素材とする。また、台形石器には典型的な原の辻型台形石器や枝去木型台形石器が含まれており、ナイフ形石器文化中期後半から後期（萩原1995）に想定できよう。石原24区第XII層直上からは玄武岩製の剥片1点が検出されている。石原24区は前述のとおり土石流による巨礫群が検出されており、第XII層はその礫群よりも下層である。火山灰分析により第XII層からAT火山灰が検出されており、出土石器はAT降灰後の資料である。

（1）後期旧石器時代初頭の石器群（第11図1～3）

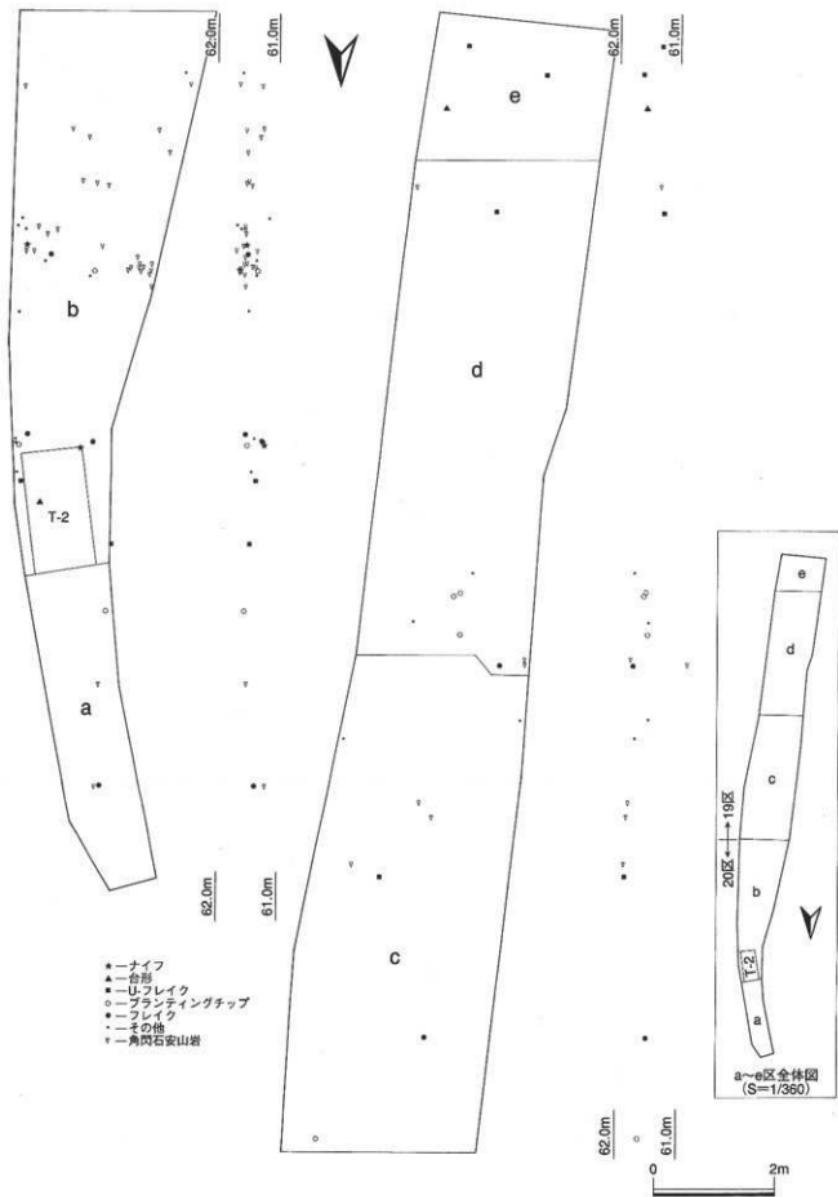
1はやや灰色の玄武岩製円盤型石核である。握りこぶしほどの円盤を素材とし、分割後に周辺部を打点とし、求心的な剥離により寸詰り状の剥片を剥離している。2・3については以前資料紹介を行った資料である（川道・辻田2000）。基本的には資料紹介時の内容を踏襲する。2は玄武岩製の局部磨製石斧で、素材となる玄武岩は、長崎県北部の吉井町福井洞穴周辺で産出する玄武岩に酷似する。薄い幅広の大型剥片を素材として、楕円形のわらじ形を呈し、背面側の刃部は部分的に研磨されている。主要剥離面側はほぼ全周にわたって調整剥離が行われているが、背面側は右側縁のみの丁寧な平坦剥離を施す。刃部の研磨痕周辺にはシミ状の沈着が見られる。3は台形様石器で、風化面が縞模様を呈する玄武岩系の石材である。幅広の分厚い剥片を素材とし、右側縁には主要剥離面側から丁寧な側縁調整がなされる。また、主要剥離面側は丁寧な平坦剥離により厚さを減している。左側縁は調整が見られず切断面である。

（2）石原a～e区

遺物分布（第12図）

石原a～e区は土黒西川が緩やかに「くの字」状に蛇行する頂点部分の外側（東岸）に位置する。この調査区付近は上層に薄く縄文時代や中世の包含層があり、下層（旧石器部分）は層厚1.5mを越す黄色の固くしまった砂層である。その砂層は4層に細分され、上から第VIa層、第Vlb層、第VIc層、第VID層とし、旧石器遺物包含層は第Vlb層であり、第VIc層上面が当時の生活面と想定される。この硬くしまった黄色砂層は西側を流れる土黒西川の作用によって形作られた自然堤防で、数度の氾濫によって第VIa層～第VID層が堆積したものと考えられる。したがって、当地区は河川氾濫の終息後、旧石器人たちによって営まれた一時的（キャンプサイト的）な遺跡と想定される。

検出された石器は85点。内容はナイフ形石器3点、台形石器3点、使用痕のある剥片6点、フレイク7点、プランティング・チップ8点、調整剥片4点、チップや碎片17点、角閃石安山岩砾37点である。調査地点の土質は、調査に使用したねじり鎌の刃が半日もたずに潰れてしまうほど硬質で、チップなどの小破片は相当数見逃しがあるものと考えられる。調査範囲が狭小で遺物の出土も少なく、遺跡全体の様相が把握できないが、出土遺物の集中部分がいくつか見られる。1カ所目はT-2及びb区を中心とした部分で、ナイフ2点、台形石器1点、及びプランティング・チップやチップが検出されており、石



第12図 石原遺跡 a~e 区旧石器時代遺物分布図 (1/80)

器の製作にかかる場であろう。2ヶ所目はc区～d区にかけて、プランティング・チップが数点検出されている。ツールの検出はないがこれらでも石器の製作にかかる場であろう。3ヶ所目はe区付近で台形石器1点、使用痕のある剥片2点が検出されている。以下、出土遺物について紹介する。

ナイフ形石器（第13図4～6）

4～6はいずれも厚手の幅広剥片を素材としている。4・6が黒曜石、5が玄武岩製である。4は左側縁に主要剥離面側から丁寧なプランティング加工を行い、右側縁も下半部に同じようにプランティング加工を施す。また、打面側から背面へ顯著な平坦剥離を行うが、打面の除去までは至っていない。打面は單剥離面打面である。5は左側縁に主要剥離面側からプランティング加工を行い、右側縁も下半部に同じように加工を施すが、最下部は素材剥片の辺縁を残す。素材剥片は求心的な剥離を行う石核から剥離されたものである。6は第Vlb層トレント（T-2）確認調査時の廃土中の資料であり、はっきりした出土位置は不明であるが、他の遺物と同様のものと考えられる。左側縁の主要剥離面側からのみプランティング加工を行う1側縁加工ナイフである。下部の欠損は当時のものである。

台形石器（第13図7・8）

7は黒曜石製で、厚みのある剥片を素材とし、右側縁は打面から背面に顯著な平坦剥離を行うが、打面の除去までは至っていない。左側縁は細かい調整のみで、ほぼ当初の素材剥片の形を残している。打面は単剥離面打面である。8は風化面が縮模様を呈する玄武岩製で、求心的な剥片剥離によって剥離された厚手の幅広剥片を素材とした、典型的な原の辻型台形石器である。右側縁は打面を除去するように丁寧な調整剥離が施され、背面側には右側縁から大きな平坦剥離が施される。左側縁は下部にノッチ状の小さな剥離を行う。上部及び左側縁上半部が素材剥片の辺縁部である。石材は違うが田助遺跡（萩原・川道1981）の台形石器に形体が酷似するものが見られる。

使用痕のある剥片（第13図9～14）

9は黒曜石製で、背面の剥離痕から、比較的打面を固定して剥片剥離を行った石核から剥離された剥片で、左側縁に微細な剥離痕を有する。また、打面部分も使用によるものか除去されている。10は玄武岩製で、求心的な剥片剥離によって剥離された剥片で、丸い円盤状である。下縁の約半周にわたって微細な剥離痕を有する。打面は単剥離面打面である。11は黒曜石製で、打面転移を頻繁に行う石核から剥離された剥片で、下縁部の直線部分に微細な剥離痕を有する。打面は碟面である。12は黒曜石製で、打面を固定して剥片剥離を行った石核から剥離された不定形の剥片で、左側縁の主要剥離面側からスクレイパー状の剥離痕を有する。13は黒曜石製で、背面に大きく碟面を残す。打面側は折れ（切断？）により大きく欠落しており、下縁に主要剥離面側からスクレイパー状の剥離痕を有する。原石の碟面を除去する際に出た剥片を転用したものである。14は黒曜石製で、背面下部に碟面を残す。打面は単剥離面打面で、先行する2回の同一方向の剥離により、鋸歯状になった打面部の谷の部分に打面部側からノッチ状に微細な剥離が施される。

剥片（第13図15～17）

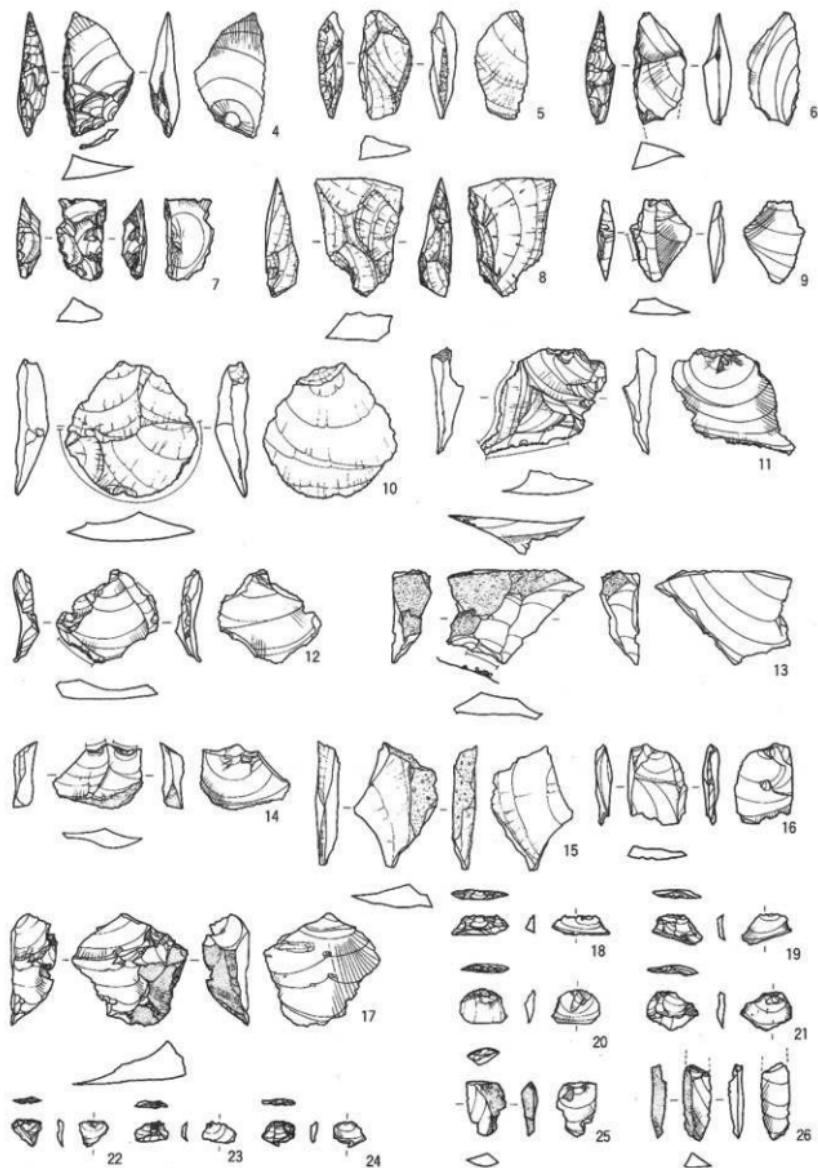
15は玄武岩製の不定形の剥片で碟面を残す。16は青灰色黒曜石製で幅広の剥片である。左側縁は切断されている。17は黒曜石製で碟面を大きくこす。

プランティング・チップ（第13図18～24）

18～24は背面側に先行する横方向の剥離痕を有し、その後打面側から複数の細かい調整剥離痕が見られる資料である。いずれも、ナイフ形石器や台形石器作成時のものと考えられる。

調整剥片（第13図25・26）

25、26は背面の一部に碟面を残す剥片で、石核の碟面除去等による剥片である。



第13図 石原遺跡 a～e 区出土旧石器時代の石器 (2/3)

0 5cm

石原24区第XII層出土遺物（第14図27）

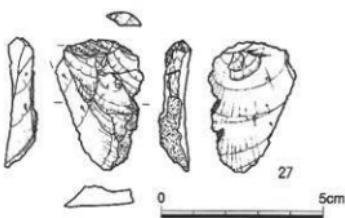
27は第XII層直上出土の玄武岩製の剥片である。背面の一部に縦面を残し、打面側からは先行する細かい剥離が入る。左側縁の上部は発掘時の欠損で、当初は二等辺三角形状の形状であったと考えられる。打面は單剥離面打面である。

層位外出土遺物（第15図28・29）

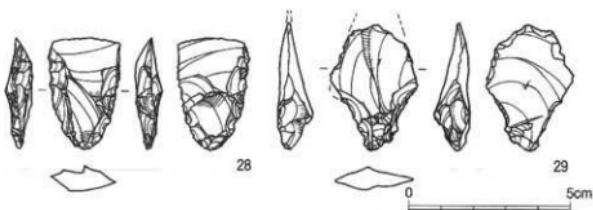
28は石原11区の中世溝状遺構内から検出されたもので、第Vlb層出土の石器と供伴するかどうかは不明である。青灰色黒曜石製で両側縁及び基部は丁寧な平坦剥離が施されており、

枝去木型合形石器の範疇に入るものである。29は石原23区表土出土遺物で欠損部分が多いが、黒曜石製の剥片尖頭器と考えられる。（辻田）

(註1)長崎大学長岡信治氏ご教授による。



第14図 石原遺跡24区XII層出土石器(2/3)



第15図 石原遺跡層位外出土遺物(2/3)

第2表 旧石器時代出土石器計測表

図 番 号	遺 跡 区	層 位	器 種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考	
11	石原 10	IIIb	円盤型石核	玄武岩	10.5	8.6	4.6	442.1	晩期包含層	
2	石原 3	IIIb	局部磨製石斧	玄武岩	11.0	7.4	1.7	154.9	早期遺物混在	
3	石原 1	IIIb	台形棒石器	玄武岩	4.0	3.3	0.8	12.3	表土	
4	石原 b	Vlb 下面	ナイフ	A	3.9	2.2	0.9	5.1		
5	石原 b	Vlb	ナイフ	F	3.3	1.6	0.8	4.0		
6	石原 b	T-2 廃土	ナイフ	B	3.5	1.6	0.9	2.9	廃土	
7	石原 b	Vlb	台形	A	2.5	1.5	1.8	2.4	T-2 トレンチ出土	
8	石原 e	Vlb	台形	H	3.7	2.7	1.0	7.6	原の辻型台形石器	
9	石原 b	Vlb	U・フレイク	A	2.5	1.9	0.5	1.6		
10	石原 c	U	U・フレイク	G	4.1	4.1	1.0	11.9		
11	石原 d	Vlb-Vlc	U・フレイク	B	3.2	3.9	1.0	5.0	打面は縦面	
12	石原 e	Vlb	U・フレイク	B	2.8	3.2	0.8	3.9	スクレイパー状の使用痕	
13	石原 e	Vlb-Vlc	U・フレイク	A	2.9	4.2	1.2	8.2	ノッチ状の使用痕、発掘時に分割	
14	石原 b	Vlb 下面	U・フレイク	A	2.0	2.8	0.7	2.4	縦面を残す・ノッチ状の使用痕	
15	石原 a	Vlb	フレイク	F	3.8	2.5	0.7	5.2		
16	石原 20	Vlb	フレイク	E	2.4	1.8	0.5	1.9		
17	石原 b	Vlb 下面	フレイク	C	3.4	3.5	1.4	9.3	角縦・縦面を残す	
18	石原 20	Vlb	ブランディング・チップ	A	0.6	1.8	0.3	0.2		
19	石原 b	Vlb 上層	ブランディング・チップ	B	0.9	1.5	0.3	0.2		
20	石原 b	Vlb 下面	ブランディング・チップ	B	1.0	1.5	0.3	0.3		
21	石原 d	Vlb 下面	ブランディング・チップ	C	1.2	1.6	0.3	0.3	表面に縦面	
22	石原 c	Vlb 上面	ブランディング・チップ	B	0.8	0.9	0.2	0.1		
23	石原 d	Vlb 下面	ブランディング・チップ	C	0.7	1.1	0.2	0.1以下		
24	石原 a	Vlb	ブランディング・チップ	A	0.8	1.0	0.2	0.1		
25	石原 20	Vlb	調整剥片	A	1.7	1.2	0.5	0.7	円縦・表面に縦面	
26	石原 20	Vlb	調整剥片	B	2.4	0.9	0.5	0.7	円縦・表面に縦面	
14	27	石原 24	XII直上	フレイク	G'	4.0	2.7	1.0	7.5	
28	石原 11	III	台形	E	3.4	2.2	0.8	4.8	中世溝包含層	
29	石原 23	表土	剥離尖頭器	B	3.9	2.7	1.1	7.2	欠損部分が多い	

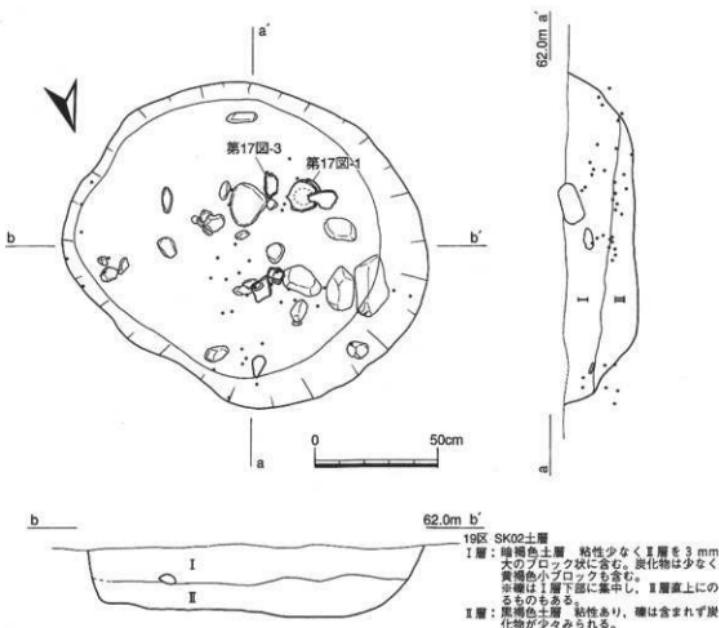
第4章 繩文時代

第1節 土坑・溝

石原19区 SK02 (第16図・図版4)

中世の土坑 (19区 SK01) (57p 第59図) の南西で発見された縄文時代中期から後期の土坑である。規模は南北 1 m33cm、東西 1 m42cm をばかり、ほぼ円形である。検出面からの深さは中心部分約27cm、壁際部分約20cmを測る。覆土は2層に分層でき、遺物や礫の大部分は層境に集中し、下層にのるような形で上層とともに堆積したものと思われる (第16図は主な遺物のみを図示し、小破片となっているものはドットで示した)。覆土中には土器片 (中期～後期の土器片) や礫が多く含まれており、平面的な集中は中心部分から南東部分に偏っており、南北方向セクション (a-a') でも南東部分が低くなっている。下層の堆積後、上層の堆積とともに土器片・礫が入り込んだものと思われる。地形的には北側に下っており、北側からの自然堆積は考えにくい。

(竹中)

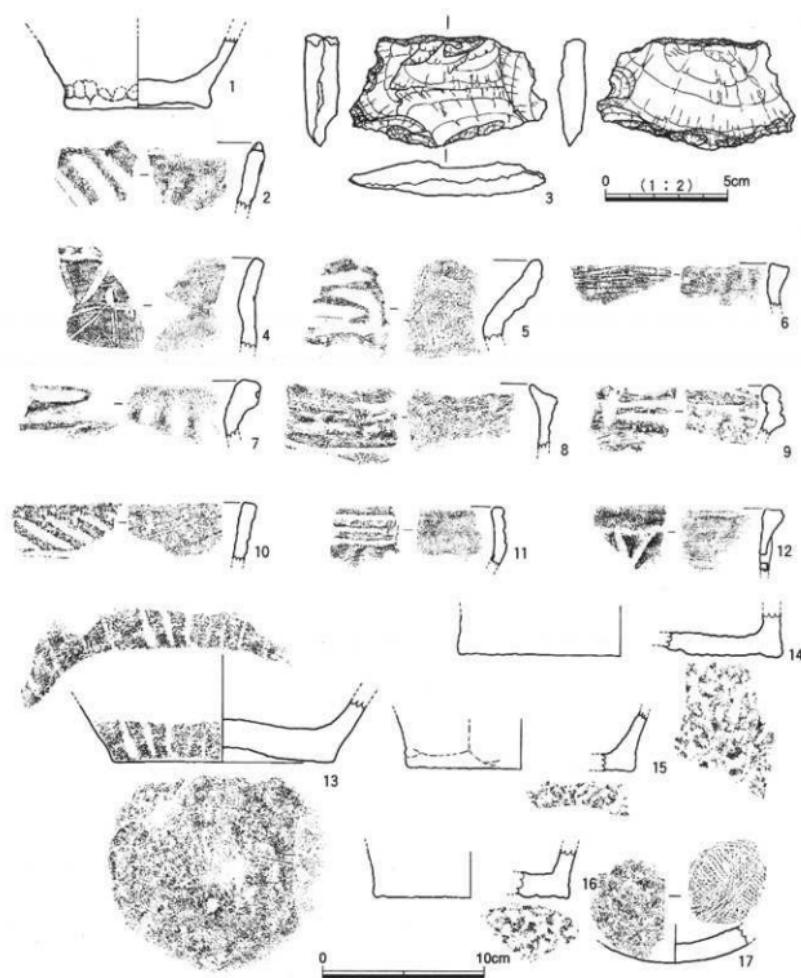


第16図 石原遺跡19区 SK02(1/20)

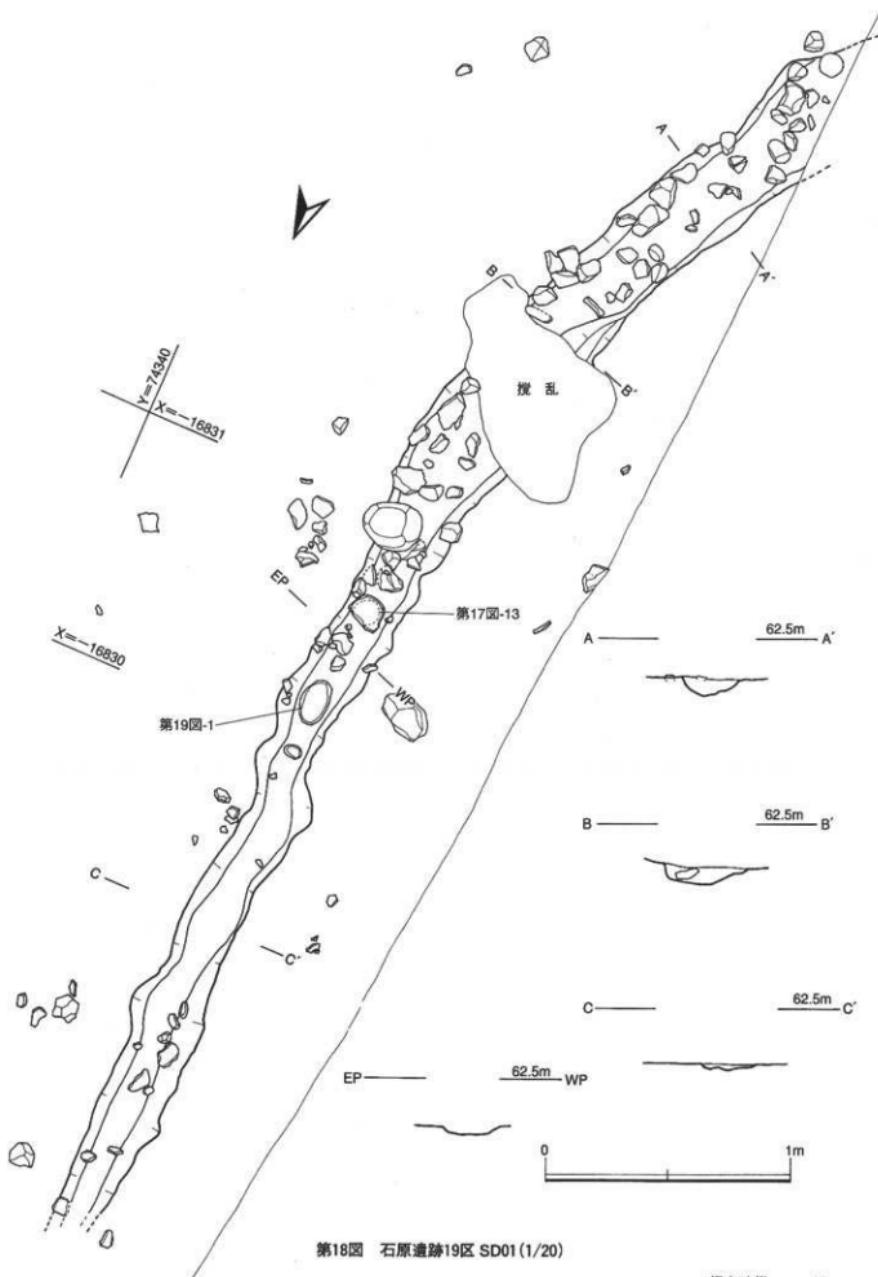
石原19区 SK02出土遺物 (第17図・図版18下)

1は縄文時代中期～後期の土器底部である。円形粘土板の上に粘土紐を巻き上げる成形法である。粘土紐の痕跡が一部で残り、底部付近は輪積みではない。2は阿高系土器の口縁部片であり胎土に滑石を含む。3は玄武岩製のスクレイパーで、自然面を打面とした横長の剥片を素材とする。

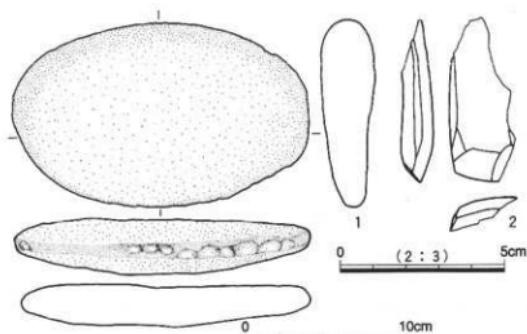
(竹中)



第17図 石原遺跡19区 SK02・SD01出土遺物(1/3-1/2)



第18図 石原遺跡19区 SD01(1/20)



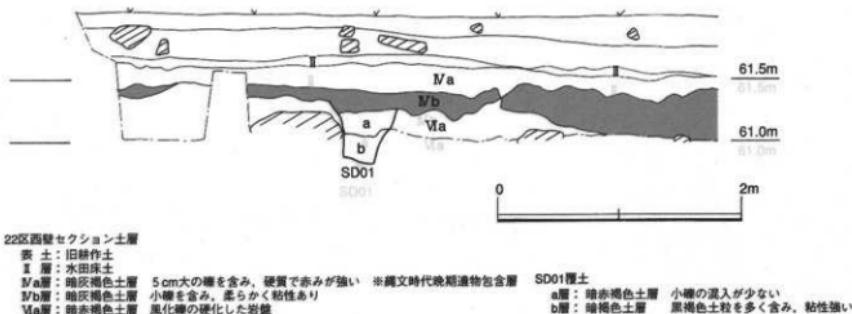
第19図 石原遺跡19区 SD01出土石器(1/3・2/3)

覆土には大量の礫・滑石混入土器片・石器・剥片を含み、縄文時代中期～後期の溝として想定される。覆土は分層ができず、ほぼ一気に埋まった感が強い。底部片・口縁部片の残りが良く、胴部片などは小さい破片である。

(竹中)

石原19区 SD01出土遺物 (第17・19図・図版17)

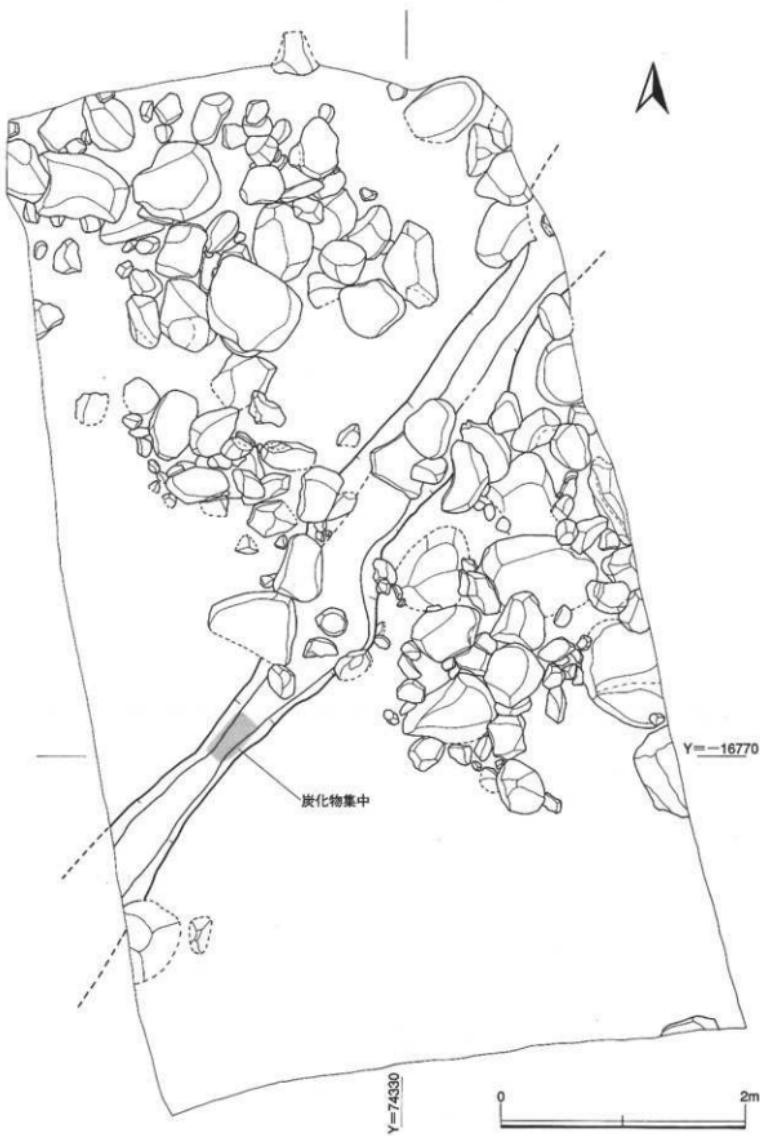
口縁部片では、4・5・7は胎土に滑石を含まず、雲母粒を多く含む。底部片では17が滑石を含まないが、他はすべて滑石を大量に含んでいる。口縁部片はいずれも文様が特徴的で、5や7などは指頭ではないが、比較的太目の文様を曲線や直線を交えながら施している。7の内面は指頭による強い縱方向のオサエがみられ、拓影にみるものは文様ではない。次に10や12などが幅約5mmの線文様を施しており、4や9・11などはさらに細い線による直線的な文様を主体としている。口縁部の形態については小破片のため全体像がつかめず、図に示した傾きは参考程度と考えていただきたい。9や11については摩擦縄文がみられないが、他の構成要素は北久根山式・西平式・三万田式などの後期中葉以後の口縁部形態である。しかし、滑石を含んでおりそこまで下らせて良いのか疑問がこる土器片である。



第20図 石原遺跡22区・西壁セクション・SD01セクション図(1/40)

石原19区 SD01 (第18図・図版3)

検出延長5mを測る溝で、深さは最深部で約15cm、底面レベルはA-A'で62.27m、B-B'で62.27m、EP-WPで62.27m、C-C'で62.25mをはかる。北北東方向に約1m20cm、その後ほぼ真北に折れ曲がり約3m50cmまで検出し、それより北は削平されている。一部搅乱を受けているが、検出面での幅はおよそ38cmを測り、砂礫を主体とした



第21図 石原遺跡22区 SD01 (1/40)

形態的には口縁端部を肥大させる6や7・12、単純な断面隅丸方形となる4や10・11、断面が丸くなる9、そして8は内湾するように端部が内側に屈曲しているものなど多種類存在する。口縁部の観察では、胎土の特徴や口縁部形態、文様構成などに一定した要素がみられず、多形式の土器要素を含んでいる様子である。土器底部片は13のみがほぼ完全な形でのこっており、底部外側すれすれの位置まで縦方向の文様が施され、滑石を大量に含む特徴などから、阿高系の土器と考えられる。底部の立ち上がりには13などのように傾斜するものと、14のように直立するものがある。17は曾畠式の底部片である。第19図1は扁平な橢円形の石器で、側面を敲打して形をつくり、表面は全面的に研磨している。2は蛇紋岩製の小形の石斧の一部である。部分的に研磨を施しながら面取りを繰り返して、刃部を作り出している。

(竹中)

石原22区 SD01 (第21図・図版4)

検出延長約7.0mを測る縄文時代晩期の溝である。地形的には南西方向から北東方向へ低いが、等高線に直行するようにして北東方向へのびている。北西側には自然疊が集中する部分があるが、それを避けるようにして若干北に折れ曲がるが北東方向へ直線的にのびている。疊の集中を避けているのではなく、疊を動かしての構築であろう。底面レベルは西壁セクション約60.77m東壁セクション約60.5mその中间付近で約60.5mをはかる。やはり北東方向へ傾斜している様子である。検出幅は約50cmをはかり、深さは40cmほどで西壁セクション部分が最も良く残る。底面に密着するように炭化材が集中する部分があり、灰色粘土がその下層に堆積している。出土遺物には恵まれなかったが上部に堆積する土層は縄文時代晩期の遺物包含層で、その上は古代の遺物包含層である。

(竹中)

第3表 石原遺跡19区 SK02・SD01出土土器観察表

固 国	遺 構	番 号	部位	調 査		文様・調整	備 考		
				外 面	内 面				
17 区 SK 02	19 区 SK 02	1	底部	橙色 7.5YR7/6~2.5YR6/8	橙色 5YR6/6	角閃石・石英・雲母・ 黒・白・赤色粒子	ナデ	ナデ	スス付着
	2	口縁部	赤褐色 2.5YR4/8	赤褐色 2.5YR4/8	角閃石・石英・黒・白 色粒子・滑石	斜線 ナデ	ナデ		
	4	口縁部	赤褐色 5YR4/6	明赤褐色~黒褐色 5YR5/6~2/1	角閃石・石英・雲母・ 黒・白・赤色粒子	直線と曲線 ナデ	ナデ		
	5	口縁部	橙色~褐灰色 7.5YR6/6~4/1	明褐色 7.5YR5/6	角閃石・石英・雲 母・黒・白色粒子	直線と曲線 ナデ	ナデ		
	6	口縁部	赤褐色 5YR4/6	赤褐色~黒褐色 5YR4/7~3/1	石英・滑石・黒・ 白・赤色粒子	横走条痕 ナデ	ナデ		
	7	口縁部	明赤褐色~暗赤褐色 5YR5/6~3/4	明赤褐色 5YR5/6	石英・雲母・黒・ 白・赤色粒子	線刻 ケズリ・ナデ	ナデ		
	8	口縁部	にぶい赤褐色~褐灰色 5YR5/4~4/1	にぶい褐色~褐灰色 7.5YR5/4~4/1	滑石・角閃石・石英・ 黒・白・赤色粒子	ケズリ ナデ	ナデ		
	9	口縁部	明赤褐色 5YR5/6	橙色 5YR6/6	滑石・角閃石・石英・ 黒・白・赤色粒子	横十線の直線 ナデ	ナデ		
	10	口縁部	赤褐色 5YR4/8	赤褐色~黒褐色 5YR4/8	石英・雲母・黒・白 色粒子・滑石	直線 ナデ	横走条痕 ナデ		
	11	口縁部	にぶい赤褐色~赤褐色 5YR5/4~4/6	にぶい赤褐色 5YR5/4~4/6	滑石・角閃石・石英・ 黒・白・赤色粒子	直線 ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ		
	12	口縁部	赤褐色 5YR4/6	赤褐色 5YR4/6	滑石・石英・雲母・黒・ 白色粒子	ナデ	ケズリ		
	13	底部	にぶい橙色 10YR5/6~7.5YR6/1	にぶい橙色~褐灰色 10YR7/3~6/1	角閃石・黒・白・赤 色粒子・滑石	直線 ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	鰐骨底	
	14	底部	赤~明赤褐色 10YR5/8~2.5YR5/6	にぶい黄褐色 10YR5/3	黒・白・赤色粒子・滑石	ケズリ	ケズリ・ナデ	鰐骨底	
	15	底部	赤色 10YR4/6	黒色 7.5YR2/1	石英・黒・白・赤色粒子・ 滑石	ケズリ	ケズリ	鰐骨底	
	16	底部	明赤褐色 2.5YR5/8~5/6	黒色 7.5YR2/1	角閃石・黒・白・赤 色粒子・滑石	ケズリ・ナデ?	ナデ	鰐骨底	
	17	底部	にぶい橙色 10YR6/4	暗灰色 N3/	角閃石・石英・黒・白 色粒子	ナデ	不定方向の条 痕		

第2節 土偶・土器・石器

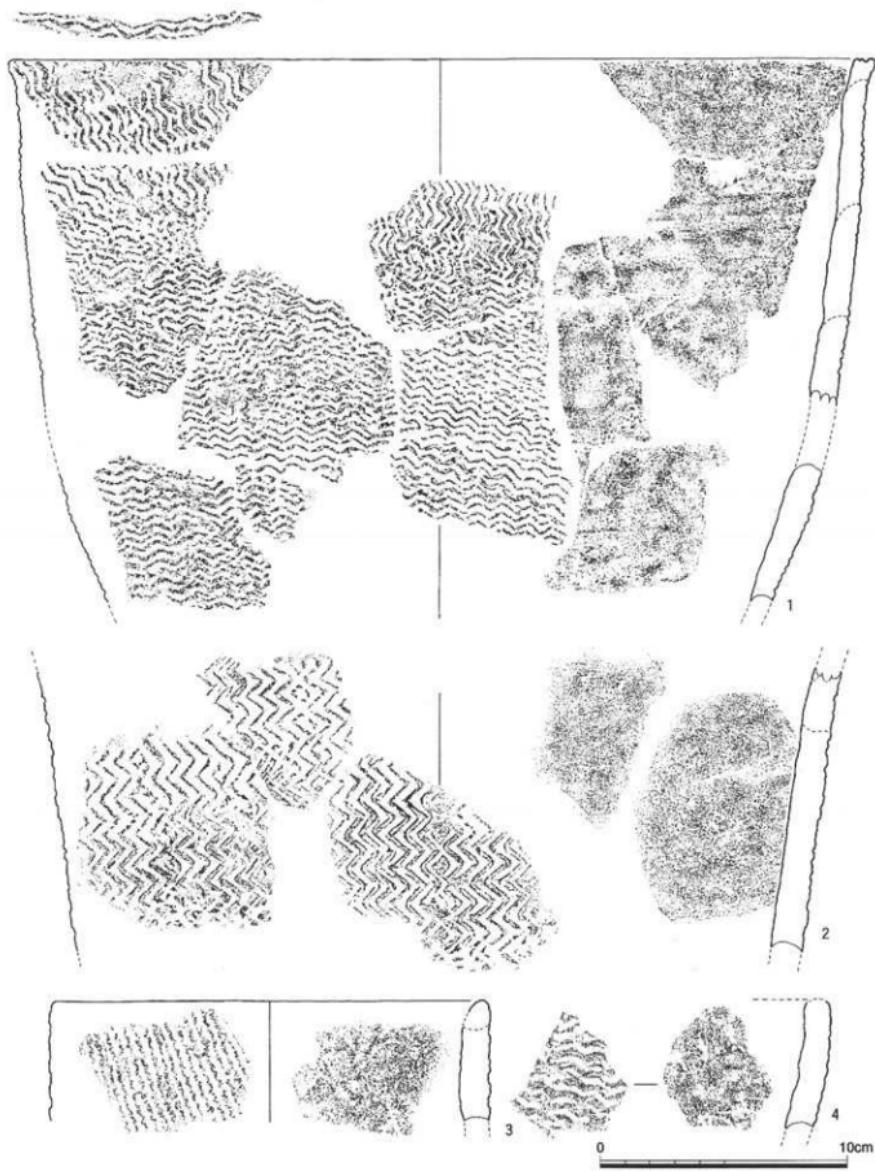
石原遺跡・矢房遺跡からは前述の遺構出土の遺物のほかに、層位出土の遺物が多くある。ここでは主な遺物について紹介する。

(1) 縄文時代早期土器

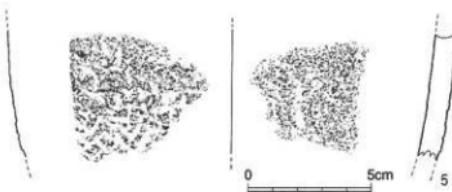
石原遺跡出土土器（第22図～第29図・第4表・図版13～15）

早期の土器は石原23区第Ⅶ層及び石原1区～4区、石原8区～10区を中心に出土している。石原23区第Ⅶ層や石原3区からは一括出土の接合資料もあり原位置に近い資料である。それ以外のものについては晚期包含層に混在するなど搅乱されているものが多い。しかしながら遺物の摩滅も少なく、また接合資料もありそれほど激しい遺物の移動はないものと考えられる。検出された土器のほとんどは山形や楕円の押型文土器で、早水台式・田村式にかけての資料と捉えられる。特筆すべき遺物として、壺形土器の検出がある。壺形土器は石原4区及び石原9区・石原10区より計4片が検出されており、うち2点（石原4区と石原9区・第28図23）が接合資料で、他2点も同一個体資料である。胴部にはほぼ直角に屈曲する肩部をもつ特徴的な資料である。長崎県内における早期の壺形土器は、押型文土器に伴うものとして岐宿町茶園遺跡（荒木1998）、鷹島町鷹島海底遺跡（高野・寺田1993）、塞ノ神・平裕式土器に伴うものとして諫早市下峰原高場遺跡（秀島他2002）、国見町百花台遺跡（古門1999）、国見町松尾遺跡（辻田2002）でそれぞれ報告されている。今回検出された資料はいずれの遺跡の資料とも類似点を見出せない。近県において類例を探してみると、熊本県大津町瀬田裏遺跡（緒方1993）において押型文土器に伴って同様の屈曲する肩部を持つ資料（瀬田裏遺跡の土器には屈曲部に穿孔があり、注口土器とされている。）が検出されている。瀬田裏遺跡ではほぼ完全に復元される資料も多く、尖底で肩部はほぼ直角に屈曲し、頸部は細くすぼまり、口縁部はラッパ状に開く器形である。石原遺跡出土の資料には穿孔の痕は確認できないが、非常に近似した器形である。以下、出土遺物について紹介する。

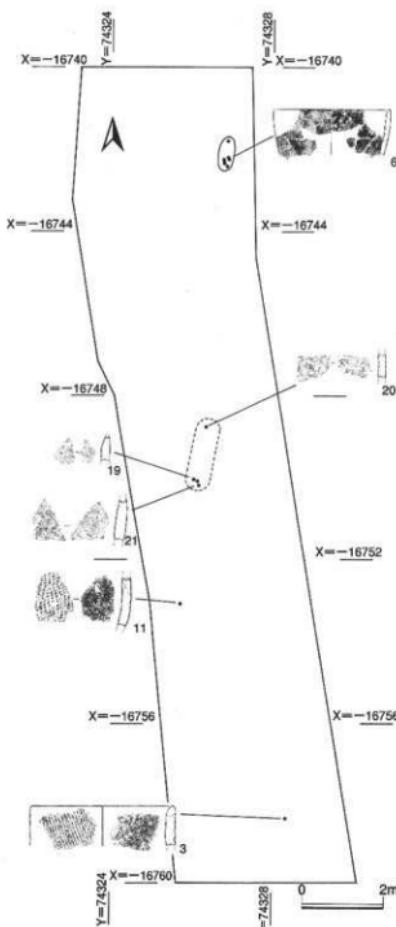
1は石原3区一括出土（第25図）の接合資料で、胴部下半から口縁部にかけての資料である。復元口径は35.5cmを測る。緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部は若干外に開く。器壁の厚さは約1cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は口縁部下8cm程度までは綾位の山形押型文を施し、それより下部は横位に施す。また、口唇部にも同様に山形押型文を施し、内面に施すは見られない。2も石原3区一括出土（第25図）の接合資料で、1に近接して検出されており、ほぼ同時期の資料と考えられる。胴部中央付近とと考えられ、実測団中央付近で径31cmに復元できる。若干外に開き気味にまっすぐに立ち上がる。器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面の上半部は綾位の山形押型文を施し、6cm間隔ほどで山形の頂点と頂点をあわせて菱形文を作り出してい。下半部は横位の楕円押型文を施し、内面に施すは見られない。3は石原23区第Ⅶ層出土（第24図）の資料で、復元口径は18cmを測る。ほぼ直立する口縁部で口唇部は丸くまとまる。器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は綾位の細かい山形押型文を施し、内面に施すは見られない。4は石原3区出土の資料で晚期包含層に混在する資料である。やや内湾気味に立ち上がる口縁部で口唇部は欠損している。器壁の厚さは約1cm、器面調整は内外面ともナデである。内面には指頭圧痕が見られる。外面は横位のゆるい山形押型文を施し、内面に施すは見られない。5は石原8区出土の資料で晚期包含層に混在する資料である。胴部下半と考えられ、実測団中央付近で径20cmに復元できる。器壁の厚さは約1cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は山形押型文を施すが、ナデ消されている部分がある。内面に施すは見られない。6は石原23区第Ⅶ層一括出土（第24図）の接合資料で、胴部から口縁部にかけての資料である。復元口径は29cmを測る。やや内湾気味に立ち上がり、口唇部は平らに面取りを施す。器壁の厚さは約1cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は横位の小粒の楕円押型文を施し、内面に施すは見られない。7は石原21区表土出土資料である。復元口径は23.5cmを測る。外に開き気味に立ち上がり、口縁部はさらに外に開く。器壁の厚さは約0.8cm、器面調整は内外面ともナデである。外面の口縁部下2cm付近には直径0.6cm、深さ0.2cmほ



第22図 石原遺跡出土縄文時代早期土器①(1/2)



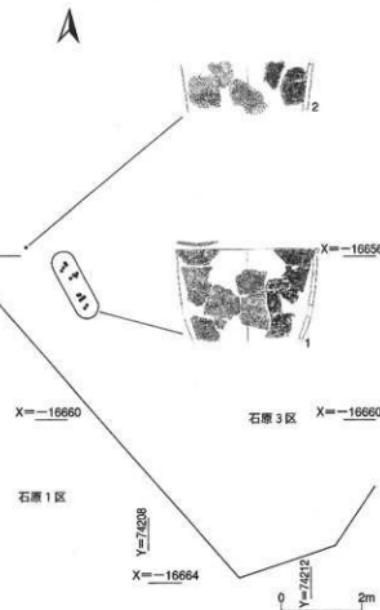
第23図 石原遺跡出土縄文時代早期土器②(1/2)



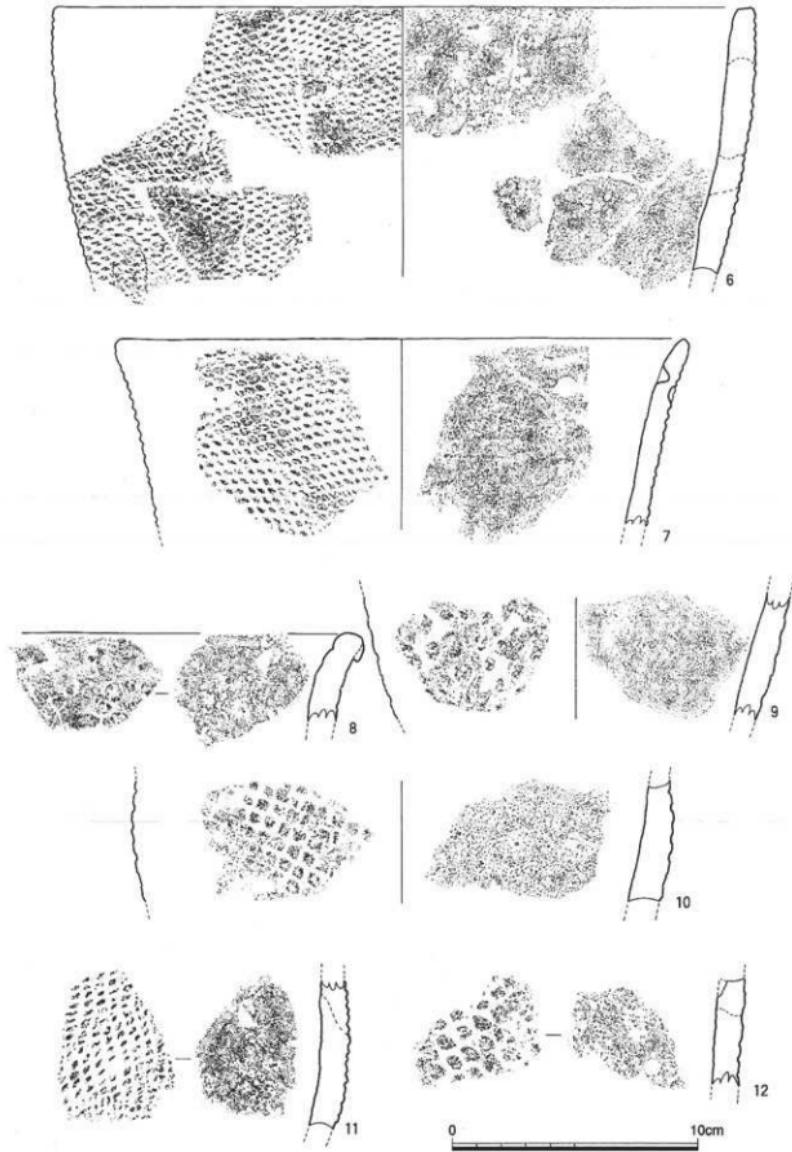
第24図 石原遺跡23区第Ⅲ層遺物分布図(1/60)

どのくぼみが見られる。また、内面にも口縁部下1.5cm付近に直径0.8cm、深さ0.4cmほどのくぼみが見られる。いずれも焼成後の作業である。両者は器壁に穿孔するために施されたものと考えられるが若干位置がずれており、穿孔には至っていない。外面は横位の小粒の楕円押型文を施し、内面に施文は見られない。

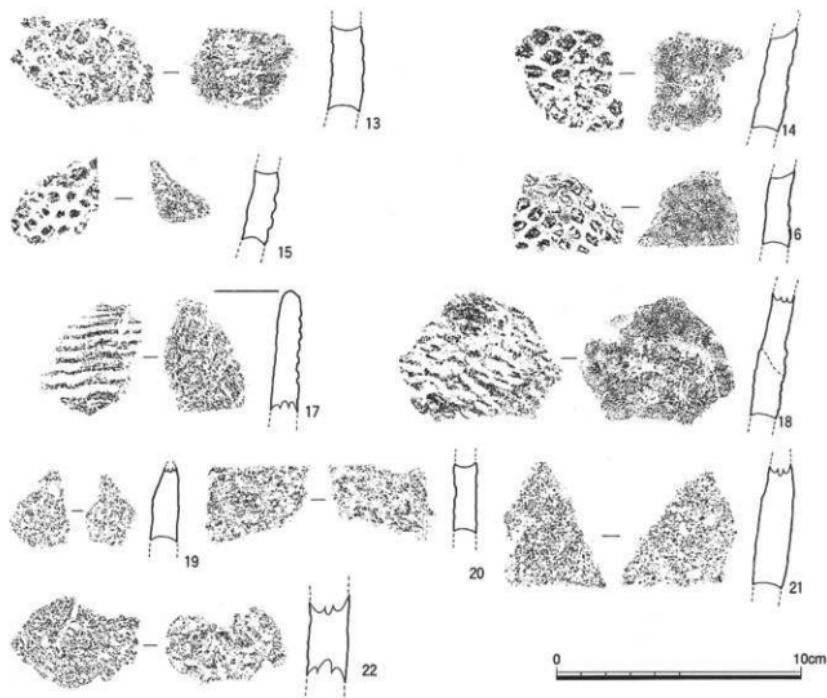
8は石原3区出土の資料で晚期包含層に混在する資料である。やや外反する口縁部で口唇部は丸くまとめ、口唇部外面には粘土紐の貼り付けがみられる。器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は楕円押型文を施し、内面も口唇部直下に大粒の楕円押型文を施す。拓影では判りづらい。9は石原4区出土の資料で晚期包含層に混在する資料である。胴部下半と考えられ、実測図中央付近で径16cmに復元できる。



第25図 石原遺跡3区縄文時代
早期遺物分布図(1/60)

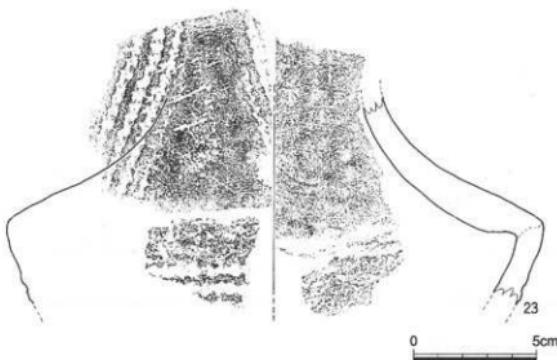


第26図 石原遺跡出土縄文時代早期土器③(1/2)



第27図 石原遺跡出土縄文時代早期土器④(1/2)

器壁の厚さは約1.4cmで、器面調整は内外面ともナデである。外面は粗い楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。10は石原9区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。胴部中央付近と考えられ、実測図中央付近で径22cmに復元できる。器壁の厚さは約1.4cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は継位の楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。11は石原23区第Ⅲ層出土(第24図)の資料である。胴部中央付近と考えられ、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は継位の小粒の楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。12は石原9区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。胴部中央付近と考えられ、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は斜位の粗大な楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。13は石原9区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。胴部中央付近と考えられ、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は斜位の粗大な楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。14は石原8区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。胴部下半と考えられ、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は横位の粗大な楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。15は石原9区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。胴部下半と考えられ、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は斜位の楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。16は石原10区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。胴部中央付近と考えられ、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は斜位の楕円押型文を施文し、内面に施文は見られない。17は石原2区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。



第28図 石原遺跡出土縄文時代早期土器⑤(1/2)

面に施文は見られない。19は石原23区第Ⅷ層出土（第24図）の資料である。ほぼ直立する無文土器の口縁部で、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整はナデのようであるが残存状況が悪くはっきりしない。

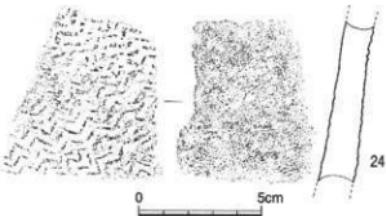
20は石原23区第Ⅷ層出土（第24図）の資料である。ほぼ直立する無文土器の肩部で、器壁の厚さは約1 cm、器面調整はナデのようであるが残存状況が悪くはっきりしない。21は石原23区第Ⅸ層出土（第24図）の資料である。ほぼ直立する無文土器の肩部で、上端がややすばまる形態を見せており、口縁部付近と考えられる。器壁の厚さは約1 cm、器面調整はナデのようであるが残存状況が悪くはっきりしない。19～21は同一個体と考えられる。22は2区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。無文土器の肩部と考えられ、器壁の厚さは約1.6cm、器面調整は内外面ともナデである。23は石原9区出土の資料で晩期包含層に混在する資料である。強く屈曲する肩部を有する壺形土器である。肩部で径22cmに復元できる。器壁の厚さは1 cm～1.5cm、器面調整は丁寧なナデである。肩部の屈曲は約90度を測り、屈曲部で輪積を行う。肩の屈曲部より上は、4条を単位とする連続楕円押型文（註1）を、間隔を空けて放射状（有文部と無文部を1セットとして8分割）に施文する。肩の屈曲部より下は、横位の連続楕円押型文を施文し、屈曲部直下の幅2 cmほどはナデ消している。内面に施文は見られない。

矢房遺跡出土土器（第29図・第4表）

矢房遺跡からも点数は少ないものの早期の土器が検出されている。しかしながら石原遺跡のような一括資料や層位的な資料ではなく、他時期の包含層や遺構に混在して検出されている。また、検出されている土器は、胎土や色調から石原遺跡の早期土器とは同じ時期のものと考えられる。したがって、縄文時代早期押型文期には石原遺跡が主な生活の場であり、矢房遺跡はその周辺部と考えられる。以下遺物を紹介する。

24は矢房1区出土の資料で古代包含層に混在する資料である。肩部中央付近と考えられ、器壁の厚さは約1.2cm、器面調整は内外面ともナデである。外面は斜位の山形押型文を施文し、内面に施文は見られない。（辻田）

（註1）第28図23の文様については明確に判断できない。図版15において拡大写真を掲載しており、読者の皆様にもご一考いただきたい。



第29図 矢房遺跡出土縄文時代早期土器(1/2)

第4表 繩文時代早期土器観察表

固 番 号	遺 跡	区	層 位	部 位	色 調		胎 土	文 様		器面調整		備 考
					外 面	内 面		外 面	内 面	外 面	内 面	
1	石原	3		口	10YR-3/1	10YR-6/1	石英・角閃石・白色粒子	上半部は縦位、下半部は横位の山形押型文	なし	ナデ	ナデ	口唇部にも山形押型文
22	石原	3		胴	2.5YR-8/4	2.5YR-7/1	石英・角閃石・白色粒子	上半部は縦位の山形、下半部は横位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	胸部・山形押型文は山の頂部をずらして部分的に菱形を作る
3	石原	23	Ⅲ	口	10YR-6/6	10YR-6/3	石英・角閃石・白色粒子(多量)	縦位の小粒の山形押型文	なし	ナデ	ナデ	縦位の山形押型文
4	石原	3	I	11	10YR-8/4	10YR-7/2	角閃石・安山岩	ゆるい山形押型文 <small>強調あり</small>	なし	ナデ	ナデ	横位の山形押型文
23	5	石原	8	胴	10YR-6/6	10YR-7/6	角閃石・白色粒子	山形押型文	なし	ナデ	ナデ	表面の文様を部分的にナデ消している
6	石原	23	Ⅲ	口	10YR-7/4	10YR-7/4	石英・角閃石	横位の小粒の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	口唇部面取り
7	石原	21	表	口	10YR-7/4	10YR-6/2	石英・角閃石・白色粒子	横位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	袖円押型文・穿孔途中の穴あり
8	石原	3		口	10YR-8/3	10YR-4/1	角閃石・白色粒子	袖円押型文・口唇部直下に粘土ひも貼り付け	口唇部直下に袖円押型文	ナデ	ナデ	
26	9	石原	4	胴	5YR-7/6	5YR-4/1	石英・角閃石・白色粒子	袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	
10	石原	9		胴	7.5YR-6/8	7.5YR-6/8	石英・角閃石・白色粒子	縦位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	
11	石原	23	Ⅲ	胴	10YR-7/4	10YR-6/1	角閃石・白色粒子	縦位の小粒の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	内面に植物織痕痕あり
12	石原	9		胴	5YR-5/8	5YR-6/6	石英・角閃石・白色粒子	斜位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	
13	石原	9		胴	2.5YR-6/8	10YR-7/2	石英・角閃石・白色粒子	斜位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	風化により器壁が剥落している
14	石原	8		胴	5YR-7/8	10YR-7/6	石英・角閃石	横位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	
15	石原	9		胴	5YR-6/8	10YR-6/3	石英・角閃石・白色粒子	斜位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	
16	石原	10		胴	10YR-5/2	10YR-5/1	石英・角閃石・白色粒子	斜位の袖円押型文	なし	ナデ	ナデ	
17	石原	2		口	10YR-7/6	10YR-8/6	石英・角閃石	波状条痕	なし	ナデ	ナデ	一野式?
27	18	石原	10	胴	10YR-8/3	10YR-8/3	角閃石・安山岩	撚糸?	なし	ナデ	ナデ	胸部・撚糸?もしくは原体系痕?
19	石原	23	Ⅲ	胴	10YR-6/4	10YR-7/4	石英・角閃石・白色粒子	なし	なし	ナデ	ナデ	無文・19~21は同一個体
20	石原	23	Ⅲ	胴	10YR-6/4	10YR-7/4	石英・角閃石・白色粒子	なし	なし	ナデ	ナデ?	無文
21	石原	23	Ⅲ	胴	10YR-6/4	10YR-7/4	石英・角閃石・白色粒子	なし	なし	ナデ	ナデ	無文
22	石原	2		胴	5YR-6/6	5YR-6/6	石英・白色粒子	なし	なし	ナデ	ナデ	無文
28	23	石原	9	肩	10YR-8/2	10YR-7/2	石英・角閃石・白色粒子	屈曲部より上は縦位の連續袖円押型文、下は横位	なし	ナデ	ナデ	壺形土器の肩から胸部屈曲部
29	24	矢房	1	胴	10YR-8/3	10YR-6/2	石英・角閃石・白色粒子・赤色粒子	斜位の山形押型文	なし	ナデ	ナデ	

(2) 縄文時代前期土器

石原5区出土土器 (第30図～第32図・第5表・図版16)

前期の土器は石原5区より出土している。赤褐色の包含層から内外面共に条痕地の土器群が検出されており、轟B式の範疇に含まれる資料である。この赤褐色の包含層からは轟B式土器のほかに早期や中期及び後期の土器片が出土しているが、出土点数約200点のうちそれらは極少数であり、おむね前期前業の時期の包含層であろう。しかしながら、土器片はいずれも小片であり、土層の堆積は第1次的なものではない。この赤褐色の包含層は、石原5区の西端でのみ検出されているが、近接する石原19区からも数点はあるが轟B式の土器片が検出されている。したがって、周囲の地形などから、石原5区及び石原19区の南側一帯に本来存在する包含層が、降雨等の影響により流出・再堆積したものと考えられる。その流出・再堆積の時期は、赤褐色の包含層（前期轟B式）除去後に検出された落ち込み（註1）の中から、中期及び後期と想定される土器片が検出されており、それ以降の比較的新しい時期に起こったものと考えられる。また、石原19区は中期阿高系の土器が主体をなす遺構・遺物が検出され、石原22区・9区は黒色磨研土器が主体をなす晩期の遺構・遺物が検出されている。時代が新しくなるにつれて遺構・遺物の出土位置が北上することも見て取れる。付け加えれば、今概報では紹介していないが、さらに北側の矢房遺跡においても、晩期の遺構・遺物が多く検出されている。

出土土器の多くは胎土中に近在の角閃石安山岩の小礫を含んでおり、在地で焼成されたものと考えられる。また、隆帶の大きさが1のような細いものと、2のように太くしっかりしたものがあり、若干の時期幅が存在するのであろう。島原半島においては概期の資料の検出は稀である。

出土土器はその形態や特長により分類が可能で、次のa類～d類に分ける。

a類 - 第30図1～12で、いわゆるみみず腫れ状隆帯を貼り付けるもの。

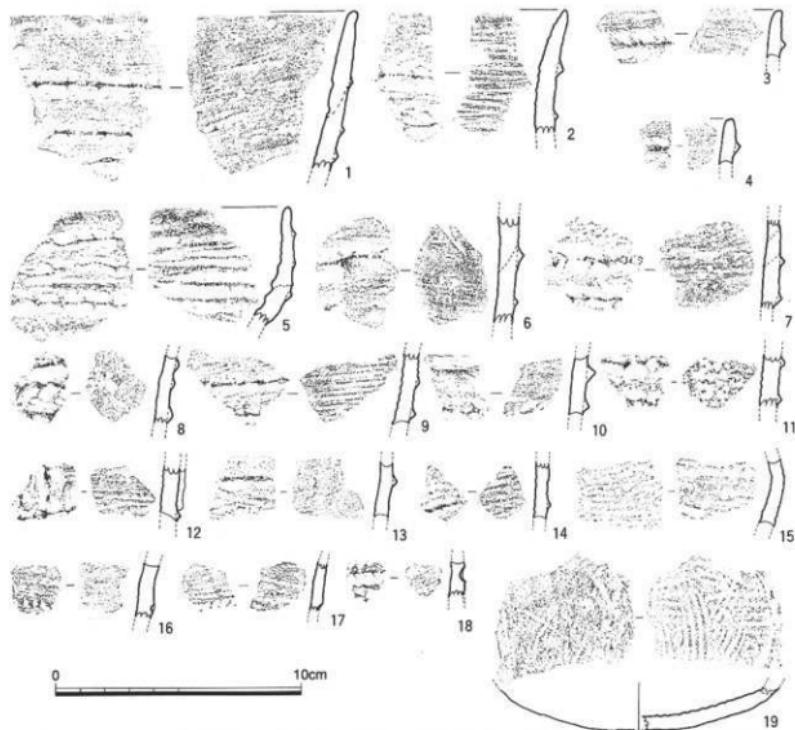
b類 - 第30図13～14で、微隆起帯を貼り付けるもの。

c類 - 第30図15で、屈曲する胴部を有するもの。

d類 - 第30図16～18で、刺突文を施すもの。

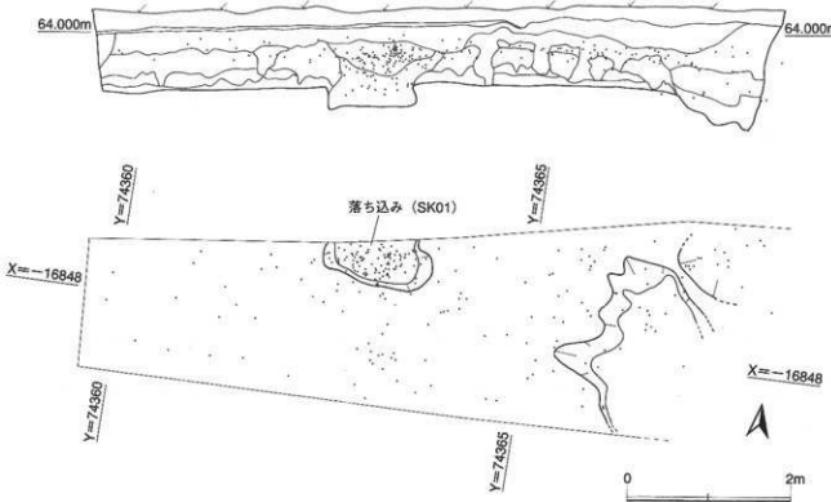
第30図19は底部であるがいずれの分類に入るのか言及は難しい。第32図20～22はその他の時代の資料である。以下、個別に紹介する。

1は口縁部で、直立気味に立ち上がり口唇部は丸くまとめる。器壁の厚さは約8mm、地文は内外面共に横走条痕があるが、その後内外面ともにナデられている。外面には約2cm間隔で細めの断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。2は口縁部で直立する胴部から口縁部は外反する。器壁の厚さは約8mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、外面はナデられている。外面には約2cm間隔で断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。3は口縁部で、ほぼ直立する。口唇部は若干外に張り出し、上面は面取りされている。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともに丁寧にナデられており、器面は滑らかである。外面には断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。4は口縁部で、ほぼ直立し、口唇部上面は面取りされている。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデされている。外面には断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。5は口縁部で、内湾気味に立ち上がり口縁部は直立する。器壁の厚さは約7mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、外面はナデされている。外面には約1cm間隔で断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。6は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約7mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともに丁寧にナデられており、器面は滑らかである。外面には約2cm間隔で断面三角形の横走する太いみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。7は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデされている。外面には約1.5cm間隔で断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。8は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走



第30図 石原遺跡5区出土縄文時代前期土器(1/2)

条痕であるが、その後内外面ともにナデられており、内面には指頭圧痕が残る。外面には約1cm間隔で断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。9は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走条痕である。外面には約1.5cm間隔で断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。10は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデられている。外面には約1.5cm間隔で太めの断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。11は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約7mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデされている。外面には約1.5cm間隔で断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付ける。12は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデされている。外面には断面三角形の横走するみみず腫れ状隆帯を貼り付け、また、約1.5cm間隔で断面三角形の垂下隆帯を貼り付ける。13は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約5mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデされている。外面には断面三角形の横走する微隆起帯を貼り付ける。14は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約5mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデされている。外面には断面三角形の横走する微隆起帯を貼り付ける。15は胴部で、屈曲部を持つ。器壁の厚さは約



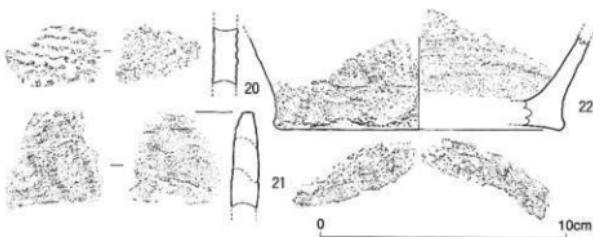
第31図 石原遺跡5区出土遺物分布図(1/60)

5mm、地文は内外面共に横走条痕である。16は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約6mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデられており、器面は滑らかである。外面には刺突具断面が三角形の横走する刺突文を施す。17は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約5mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデられている。外面には密な横走する刺突文を施す。18は胴部で、ほぼ直立する。器壁の厚さは約5mm、地文は内外面共に横走条痕であるが、その後内外面ともにナデられており、器面は滑らかである。外面には刺突具先端が三角形の密な横走する刺突文を施す。19は丸みを帯びた底部である。器壁の厚さは約5mm、地文は内外面共に不定方向の条痕であるが、外面はナデされている。胴部に続く粘土紐接合部分で折れている。

その他の土器 (第32図・第5表)

石原5区からは前述の森B式土器群の他に若干ではあるが早期及び中期以降と想定される土器が出土している。20は押型文土器胴部ではほぼ直立する。器壁の厚さは約1cm、器面調整は内外面ともにナデである。外面は横走するゆるい山形押型文を施す。21は無文土器の口縁部で直立し、口縁部は面取りを施す。器壁の厚さは約1.2cmと厚く、器面調整は内外面ともにナデであるが、内面は特に丁寧である。外面は土器製作時の粘土紐積み上げの継ぎ目が残る。所属時期は不明だが森B式土器

群より後出する資料であろう。22はやや上げ底になる底部である。器面調整は底面及び内面は丁寧なナデ、外側は底部より2cmほど上部からはヘラ状工具による下から上へ



第32図 石原遺跡5区出土その他の縄文時代土器(1/2)

の割りである。底部外周部分は指で摘み出し緩やかな波状を呈す。このほか滑石が多く含んだ阿高系の土器が数点検出されている。

(辻田)

(註1) この落ち込みについては土器の検出が少なく掘り込まれた時期は判然としない。おおむね後段階と大体把な時期設定をしておく。しかし、石器は出土点数も多く、いずれかの時期の石器組成の一剖を表しているものと考えられる。次項において説明する。

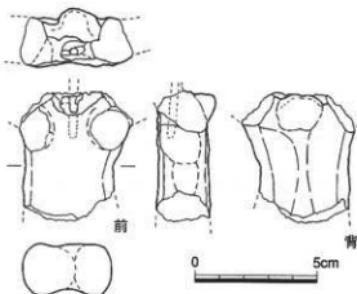
第5表 繩文時代前期土器観察表

図 番 号	部 位	類	色 調		胎 土	文 様		器面調整	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
1	5 口 a	10YR·4/2	10YR·7/3		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
2	5 口 a	5YR·3/1	5YR·5/7		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕	
3	5 口 a	10YR·4/3	10YR·7/4		角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→丁寧なナデ	横位条痕→丁寧なナデ	口唇部面取り
4	5 口 a	10YR·7/4	10YR·7/3		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	口唇部面取り
5	5 口 a	5YR·4/1	5YR·5/6		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕	
6	5 脇 a	10YR·7/4	10YR·7/4		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→丁寧なナデ	横位条痕→丁寧なナデ	
7	5 脇 a	2.5Y·7/1	10YR·6/4		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
8	5 脇 a	10YR·7/4	10YR·6/4		角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	隕帶の断面形は丸みを帯びる
9	5 脇 a	2.5Y·7/1	2.5Y·6/1		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕	横位条痕	
10	5 脇 a	5YR·4/8	5YR·5/8		石英・角閃石・角閃石安山岩・白色粒子	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
30	11 5 脇 a	2.5YR·7/2	2.5YR·7/2		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
12	5 脇 a	5YR·5/6	5YR·5/6		石英・角閃石・角閃石安山岩	断面三角形の横走するのみず離れ状条痕	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
13	5 脇 b	10YR·4/2	10YR·7/3		石英・角閃石・角閃石安山岩・赤色粒子	横走する微隆起帶	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
14	5 脇 b	2.5YR·7/3	5YR·5/6		石英・角閃石・角閃石安山岩	横走する微隆起帶	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
15	5 脇 c	10YR·7/3	10YR·7/3		角閃石・角閃石安山岩	なし	横位条痕	横位条痕	屈曲する脇部
16	5 脇 d	10YR·5/3	10YR·5/4		石英(多量)・角閃石・角閃石安山岩	横走する断面三角形の刺突文	横位条痕→丁寧なナデ	横位条痕→ナデ	
17	5 脇 d	10YR·5/4	10YR·5/4		石英・角閃石・白色粒子	横走する密な刺突文	横位条痕→ナデ	横位条痕→ナデ	
18	5 脇 d	10YR·5/4	5YR·6/6		石英・角閃石・角閃石安山岩	横走する先端部三角形の密な刺突文	横位条痕→丁寧なナデ	横位条痕→ナデ	
19	5 底	2.5Y·6/4	2.5Y·5/3		石英(多量)・角閃石	なし	不定方向の条痕→ナデ	不定方向の条痕	丸底
20	5 脇	10YR·7/4	10YR·7/2		石英・角閃石・白色粒子	横走するゆるい山形押型文	ナデ	ナデ	
32	21 5 口	10YR·6/4	10YR·6/4		角閃石・角閃石安山岩・金雲母	なし	ナデ	丁寧なヨコナデ	口唇部面取り・外周に粘土紐の縫ぎ目
22	5 底	7.5Y·6/6	7.5Y·6/6		石英・白色粒子・金雲母	なし	ヘラ状工具による下から上へのケズリ・下端はナデ	丁寧なヨコナデ	上げ底・底部外周は指で摘み出し波状となる。

(3) 繩文時代後晩期の遺物

土偶（第33図・図版18）

胸部（肩欠、腰欠）の破片で、前面から背面まで残る。割れ口は磨耗しており腕・足や首などはあらかじめ折り取られた状態であったものと思われる。前面脇に近い部分に乳房を表現した粘土塊の剥離が見られる。



第33図 石原遺跡9区出土縄文時代土偶(1/2)

左乳房脇下は、若干くびれるのに対し、右側面は寸胴である。前面は凹凸がゆるやかだが、背面には背筋を表現する凹凸が二本見られる。胸部破損面の観察より、第33図下断面図で点線を示したように2本の粘土紐を利用し、胸部が形成されている。背面頭部のすぐ後には突起が表現されている。突起は三角錐状にとび出し、上面はほぼ水平となる。頸部・肩部は失われるが、接合は径3mmの棒により頸部を接合し、肩・腕部分は胸部を構成する粘土紐の延長と思われる。胸部は横幅約2cm厚さ1cmに復元できる。

(竹中)

参考文献

- 樺原考古学研究所付属博物館編2002「樺原遺跡」樺原考古学研究所付属博物館考古資料集 第2冊
富田祐一「九州土偶出土遺跡一覧と出土数」肥後考古学会70周年記念例会資料2000年6月3日 熊本市産業文化会館

縄文時代晩期の土器（第34・35図・図版17・第6表）

ここで紹介する資料は遺構一括出土や層位一括出土の一級資料ではなく、報告者が任意で選別した縄文時代晩期に属する土器である。石原遺跡では晩期に属すると思われる遺構が検出されているが、伴出土器などに恵まれなかった。そのため、それらと同時代と思われる土器片をここで簡単に紹介する。晩期に属する土器は層位的にⅢ層以下の出土は見られない。

1～7は外面・内面に条痕による調整を行い、内面に横ナデを加える深鉢型の土器口縁部である。1には鋸状突起が、2ではリボン状突起がみられる。3・4は口縁端部が鋸状に広がっており、5～7は断面四角形の単純な口縁部を呈する。4・6・7は内面調整に丁寧なナデがみられ、条痕は消されている。8は底部の完形品であり、内外面に条痕調整を行い、底部外面は荒いケズりが加えられる。底面にはスサ状纖維で調整した痕跡が残っている。

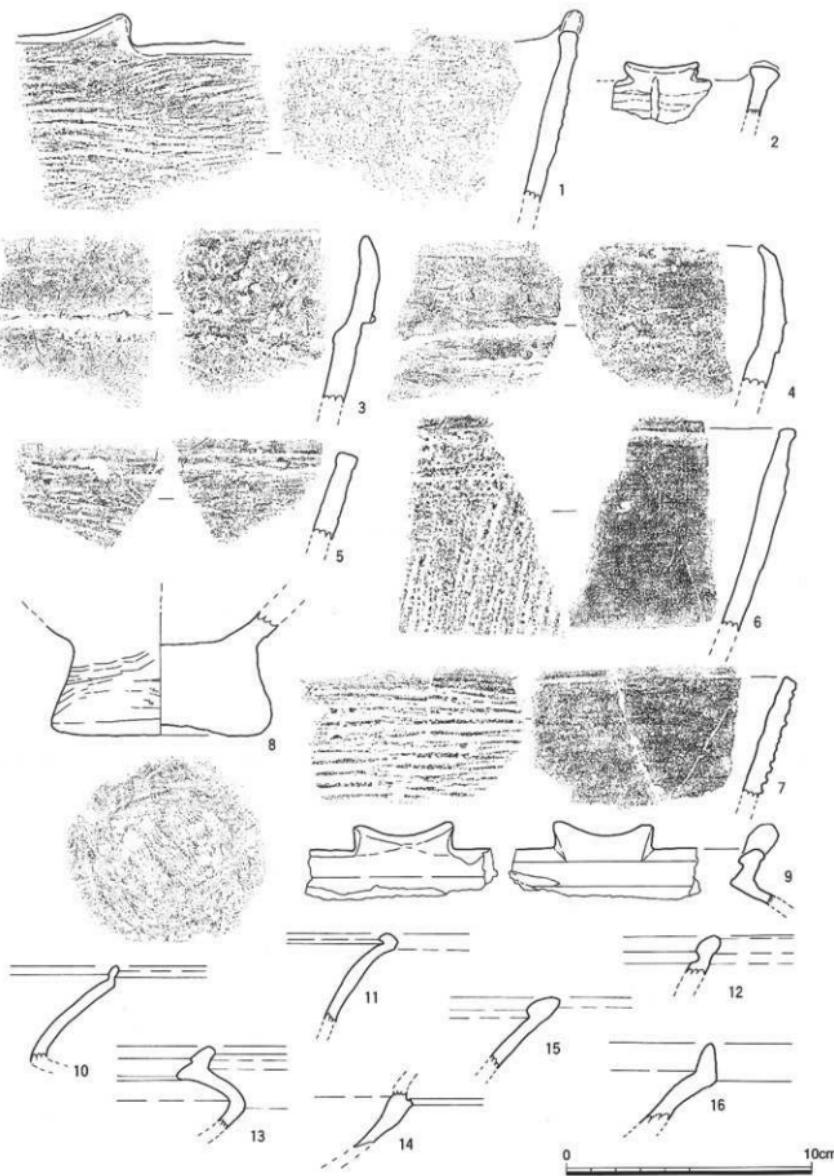
9～16は器壁の薄い内外面ともに研磨調整を施した磨研土器である。いずれも浅鉢の口縁部片と思われ、玉縁状口縁（9・12・13・15）、弱い玉縁状口縁（10・11）、断面三角形となるもの（16）に分類できる。14は口縁部下の屈曲部分である。

17は玉縁口縁部を呈する浅鉢の口縁部から胸部にかけての破片資料であり、南串山町国崎遺跡の資料と形態的に類似するものと思われる。18は纖維痕を外面に施した浅鉢形態の底部近くの破片である。器壁が厚い点が特徴的であり、焼成があまり良くなく、表面の仕上がりはもろい。内面はナデにより条痕が消されている。縦糸は間隔約6mmで編みこまれている。

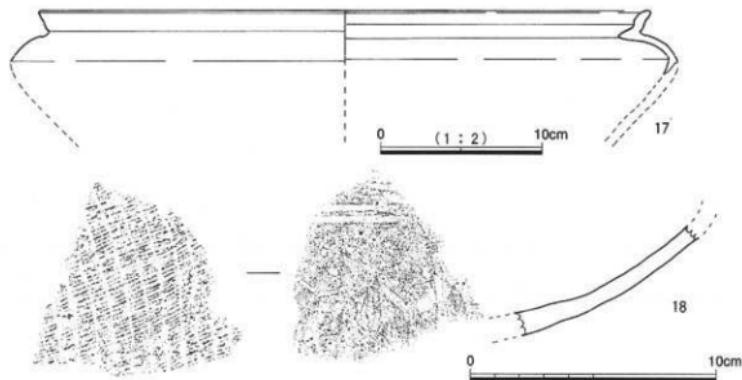
(竹中)

参考文献

- 古門雅高1995「国崎遺跡II」南串山町文化財調査報告書 第3集 長崎県南串山町教育委員会



第34図 石原遺跡出土縄文時代晩期土器①(1/2)



第35図 石原遺跡出土縄文時代晩期土器②(1/3・1/2)

第6表 縄文時代晩期土器観察表

回 番 号	遺 跡 区	層 位	部 位	色 調 外 面 内 面		胎 土	文様・調整		備 考	
				外 面	内 面		外 面	内 面		
1	石原	9	口	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	横位条痕	横位条痕+横ナデ	鱗状突起	
2	石原	10	III	口	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	横位条痕	横位条痕+横ナデ リボン状突起下 に文様あり	
3	石原	10	IIIa	口	灰黄 2.5YR6/2	にぶい黄 10YR6/3	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	横位条痕	横位条痕+横ナデ 鉢状口縁	
4	石原	4	口	灰黄 2.5YR7/2	灰黄 2.5YR6/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	横位条痕	横位条痕+横ナデ	鉢状口縁	
5	石原	10	IIIa	口	灰黄 2.5YR7/2	にぶい黄褐 10YR5/4	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	横位条痕	横位条痕+横ナデ	
6	石原	9	口	暗灰黄 2.5YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	横位条痕	横位条痕+横ナデ	内面横ナデ丁寧	
7	石原	9+6	口	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/3	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	横位条痕	横位条痕+横ナデ	内面横ナデ丁寧	
8	石原	2	底	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/3	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	条痕	条痕+ナデ*	外面ケズリ	
34	9	石原	10	口	褐灰 10YR5/1	灰黄褐 10YR6/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	玉縁口縁
	10	石原	C	III	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	玉縁口縁
	11	石原	9	口	褐灰 10YR4/1	灰 5Y5/1	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	玉縁口縁
	12	石原	B	IIb	褐灰 10YR5/1	灰黄褐 10YR6/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	玉縁口縁
	13	石原	10	口	灰黄 2.5YR6/2	黄灰 2.5YR5/1	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	玉縁口縁
	14	石原	9	口	褐灰 10YR5/1	灰黄 2.5YR6/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	玉縁口縁
	15	石原	8	口	黄灰 2.5YR5/1	淡黄 2.5YR6/2	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	
	16	石原	9	口	淡黄 2.5YR8/3	淡黄 2.5YR8/3	カクセン石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	研磨	研磨	